

增補雅言集臨見

四十六

813.6

I 619g

WMS





813.6  
I619g  
NND



691362

増補雅言集覽卷之四十六

石川雅望集  
中島廣足補

○左の部

〔さ〕(源夕顔)卅七七さおやされんいりせん(同)橋ひめ十何こともありぬこといあら  
トとおやゆる身のそとよさまのちの世をさへたとりおり給ふらんがありがささ  
(同)卅三三まろからまいかばとうらえ給さらいいとさまと御覽をべりめるまをさ  
よとせさせ給まぬ(同)もみちの賀賀十御修法などさといかくて所々よせさせたまふ  
(同)夕かは廿七七さらぬやういばらなどよもといひなすさまことよ侍らときこゆる  
よぞ(同)廿三三たよさぞ侍らん(同)桐壺廿八八をひおしよもとよほさせ給ひければさお  
やいさり(同)帶木卅三三さり例もいと給ふ方なりけり(榮)衣の珠廿八八いまとうあまや  
りようらみ申させ給へとさおもひ給へてこをいまで侍りつれと(源)未摘廿八八さる  
かたのうろとよてまぐまんとおもほしとりてさまことよさからぬうちとれこ  
さもい給ひけり(落)窪四北のうさとよさの給まさうトみものいとおやすともと  
くいてん

増補雅言集覽 卷之四十六



○さいふくも(狹)三上。若君ノ大將心をさかき不そこそさいふくもあらぬ物の心よりおとなびゆかんまゝ其あまささふらふめる中納言宰相の君をどのつらまでこそあらめ

**補**さ發語(万)四十五左奈良弊流多可波奈家牟等(同)十九志をてるりさしそ川の左丹塗の大橋の上ゆ

**補**さ(金葉)上戀五月五日わりなくともて出さる所よこもといふものをひきたりけるをこそれがたさいいひつかいける(同)戀下水の上よふるしら雪のあともかく

さえやあまし人のつらさ(同)同「こひささをいもゆるらめや旅ねして山の

いづくも袖ぬらそと(貫之集)「ひささをねがふみかれば春霞を引松をいり

でとぞとる(拾)雜秋よみ「久方の月をさやけみもとぢそのこさもうまもわきつ

べらなり(後拾)賀藤三位「おもひやれまど鶴の子はおひささを千世もとなづる袖のせ

をさを(同)哀傷行成「おくれとつねのそゆきいそぎをけふりよそとぬ旅のりか

いさ(同)同高遠「こひささぬるよかけれと世の中のかかき時のゆめとよを見れ

(同)道濟「ゆいさよつめさあまる涙をかかけとと思ふ旅衣よ(同)夏輔弘「や

へいける葎の門のいぶせさよさよせや何をたたくひかぞ(同)戀一兼盛「こひをめい

心をのぞくらみつる人のつらさよとれよかいつ(同)道濟「身をとてふくき

淵よも入ぬべしそよの心のあらまよ(同)戀三「こひさをもとすきやとする

中々よころさよがすあがのうらかみ(著聞)十六いや田よおきていとや「とら

れぬといひたりけりをういさ(同)十六をこがまいさよとぞ(後拾)戀四大「こ

ひいさをいのびもあへせうつ蟬のうつ心もなくなりよけり(万)十九つまとひい

るをどめらげさけはかな(春花)あえさきりえて(拾)親元長朝まよさおきて

ぞとつる梅の花夜のまの風のうしろめたさ(同)夏公忠「ゆきやらで山路くらいつ

不とよぎす今一聲のきりまよ(金葉)秋親房「さやけさいおもひあけりと月か

けをこよひとしらぬ人よとよや(同)冬經信「初雪のまきのまろくふりよけりこ

や小野山の冬のさびいさ(同)戀下實能「おもひさやあひ見よそのうれいさ

よのちのつらさのまざるべし(同)戀下盛經母「さのみやのこが身のうきよかむ

て人のつらさをうらまざるべき(續後撰)戀四辨乳母「こひいさいつらさよりへてや

とよよかよのこりてかくいかな(詞花)秋顯綱「よなわたの待つる程のくる

いさとありぬわりきといづま(同)賀經信「すまよのあら人がこの久いさ

よ松もいくたびおひあむるらん(月詣)賀夏忠「位山袖をつらねてのゆるりな身のう



れいさをいひかそつゝ(同)堀川「うきささつゝともあへせ池水のいひ出がさ  
 きみくづかきとも(万代)隆信「のさちりきとやまおろしのいけいさを聞かれな  
 とおもひけるかな(同)正道勝「おもひやきひとりこしちの跡たえて雪ふりつも  
 る冬のさびしさ(續古)戀四信實「いちならん時りのとのとおもふかな人をををぬこ  
 ころながさ(同)定圓「おもひいでねこそかりるれ逢ことのありむりやつ  
 らさなるらん(同)義公「身のうさをおもひりぬるものならつらき心を何りう  
 らみん(玉葉)雅平女「世のうさはおもひいるべき山のををみうかれてや月のい  
 づらん(山家)下「なべてみなそれせぬ闇のかないさを君しるべせよひかりとゆや  
 と(同)同「かくをよ君がみる夕のこひいさよ月よむりひてねをやなくらん(同)  
 同「おもへさげふの別のりなうさよをがさをりへていのおこゝろを(同)同「い  
 よへよもれけんことのかないさの死のふの空よこゝろゆきよき(同)同「まどひ  
 つゝ過けるりたのくやいさよなくく身ををけふらむる(同)同「君をおきて  
 立いづる空のつゆけさの秋さへくる旅のかないさ(同)同「とそれぬもとせぬ心  
 のつれなさもうさひらむらぬこちこそそれ(同)同「なげかるゝ心のうちのくる  
 いさを人のいらむや君よ語らん(同)同「君よをむ心の色のふかさよい匂ひもさら

よ見えぬなりけり(同)同「夏山のゆふ下風のすゞいさよならの木陰のたゝまうさ  
 いか(同)同「津の國のあゝの丸屋のさびいさの冬こそをきてとふべかりけれ(玉  
 葉)雜五俊成「あのもとよ朽れてぬべきかないさよふりよことのををちらすあか(續  
 後拾)雜中宣時「いよへいおもひもいらせ曉のねさめ老のつらさなりけり(同)同長俊  
 「世中のおやつかなさも山里のとそれ一人のえまなりけり(同)同式子「さびい  
 さの馴ぬるものを柴の戸をいさくかどひを峯のこがら(新千)哀傷「うれいさをつ  
 つむどきい袖の上よなげく涙のりらむもがな(同)同入道前「うれいさをつゝ  
 み袖も涙よてあやさぞ老の身よあまりぬる(新拾)夏雲雅「夏衣さちよる袖のすゞ  
 いさよむをばでかへる山のゐの水(同)戀二實繼「年をへてこひわたる身のくるいさを  
 あそれといおもへうちのそいひめ(新續古)夏隆轉「つれかさをかつつらと恨て  
 もなほまたれけるそとゞぎそあな(著聞)五、四宇治入道殿「さむらひけるうれいさ  
 といふそしたものを顯輔卿けさうせられけるよつれなかりけれを遣そいける「わ  
 れといへつらくも有りあうれいさの人よいさかふ名よこそありけれ入道殿きり  
 せ給ひて秀哥よ返しなうとくゆけとて遣そいけり(金葉)雜上よみ「身のうさをお  
 もひいどけば冬のよもとゞこほらぬ涙なりけり(同)同三宮「かくていもえぞむ



まどき山里のほそ谷川のこゝろをさよ(同) 戀下「つらきをもおもひもいらぬ身の  
 布どよこひーさいり(同) 盛經母「さのこやのこが身のうきよ  
 かゝつて、人のつらさをうらとさるべき(後拾) 雜四「うれーさをけふ何よりつ  
 つむらんくちつてよきとえいたもとを(古) 哀傷「色も香もむりーのこさよ、布  
 へども植けん人の影ぞこひーき(源 権が本) 五ながきよのやとよさへまどとんがや  
 くなさ(竹取)願をかふるこのうれーさとの給ひて(宇治拾) 八ノかくおそーま  
 ーさる事のうれーさ(万) 三ノ「さぶらなみいそせぢあるのとせ川おとのさやけ  
 さ瀧つ瀬でとよ(同) 七ノ「も、ーさの大宮ひとのまりりいで、あそぶこよひの月の  
 さやけさ(古) 序「さく花よおもひつく身のあぢきかさ身よいとつきのいるもーら  
 ぞて(後) 戀六、よみ「あふそくりかくすのこふる我戀を人目よりくる事のこびーさ  
 (源はし姫) 十後の世をさへとどりーり給ふら六が有ケさ(古) 戀三「現よいさも  
 こをあらめ夢よさへ人めをもると見るがわび七さ(宇治拾) 三ノうれーさ一ぎりか  
 ー(拾愚) 上「うきぐものをるれべくもる涙りを月とるま、のもれりかーさよ(榮  
 根合) 五十うさのよさあーさをさどめいどうつくーうぞもれー給ひー(散木)「そけ  
 ーさのこ山あらーつてもあきよいらで木の葉をこき散すらん(續古) 雜下「身  
 東三條院

をつめバ袖ぞぬれぬるあさころもおもひたつらんほどのかなーさ(新勅) 賀よみ人  
 「うれーさを昔ハ袖よつ、みけりまよひハ身よあまりぬるりか(拾愚) 上「さび  
 ーさハおきをへてけり萩のえの秋の末葉よまよふそつ霜(同) 下「袖のうちよ思ひ  
 かきてもうれーさのこ此春いか身よあまるん(同) 同「うれーさハむりーつ、  
 ー袖よりも猶たちちへるけふやことある(同) 同「うれーさハ昔の袖ハ名よりけ  
 てけふ身よあまるむらさきの色(同) 同「うれーさハ昔のふや君がつむ菊のとへと  
 やかほもぬふをまつらん(同) 同「かあーさのさぐひもあらト神無月ぬよの月ハ  
 有明のかた(同) 同「りかーさハ一りさならせ今ぞーるとよもかくよもさどめなき  
 世を(新後) 雜下 家隆「かあーさのきのふの夢よくらふればうつろふ花もけふのやまり  
 せ(拾愚) 下「むかーさを三世ハ佛のそ、ならハ心のやとををらよとるけよ(月清)  
 二「さびーさハ人ハかけせ成ぬれと月やハをまぬ淺ぢふのやと(貫之集)「千と  
 せてふ松を引つ、春の野のとそさもーらを我ハきまけり(玉葉) 雜四、後一條院「あ  
 へてよもあらぬ別れのかあーさハいらよとたよもいそれざりけり(同) 神祇、後久我  
 太政大臣  
 「やとよやまさりゆく峯ハこえつて、君をぞいのる身のうれーさよ(續千) 戀三、讀  
 人不知  
 「ちとやふる神のいさきもこえぬべー大宮人のとまくほーさよ(同) 戀五、政  
 國女姉「こと



わりと思ふよつけてかなしきいせをらるゝ身のつらさかりけり(同)哀傷 久明親王 「おもへさゞこのみしかたも色かたる深山のおくの秋のりなす(拾)雑秋よみ 「久くこの月をさやけみもまぢ葉のこさもうをさもわきつべらあり(重之集) 「かなしきの月日よそへて今よりわが身ひとつよとまるべきりな(在民部卿家歌合) 「まよせつるをどの久しき郭公ありでわかれんのちのこひしさ

**補** あふささるさ。ゆくさくさ。万三五 還左爾カハレサニ同去左爾波ユクサニハ月詣二房 「花

**ざ** 座(空穂 國讓)上ノ一 ちん殿の上達めのさよあつらわれ東の一のどいを彈正の宮らうまうち君の座よ二のどいらうかけて所々よせられり(源 桐つは)廿云々 ちの御座の末よ源氏つき給へり(同)廿七 かくれずの御座ひさいれのおとゞ此御座御前ヨゼンあり(同 わかな)上ノ百三 上達部のさいとりろく(同)をどめ八 おもゝちこごづりひ

むへくくもてあいつゝ座よつきならびたるさほふよりそとめ(同 やとり木)八 八限りあれば下りたる座よかへりつき給ふと心くるしき迄ぞとえける **補** 大和物百四十 八段 これよ物ぬぎてとらせざらんかの座よりたちねとの給ひなれば

**さい** 賴政集上ノ一 月きよみこよひぞとつる水底の玉藻よとどくさいのかざさへ

**和名** 九鱗音枯 漢語 抄云世比 とあるこれり鱗字書よ小魚也似鮒子而黑俗呼爲魚婢。注東呼爲妾魚(綺語抄) サイ ちひされ魚の田の畔のさまり水の中よあるなり(新撰六帖) 「あめすぐる田のきのさいの水さまりありそつまどき世をやこのまん〇田のきをよある小魚かり(童蒙抄) 「山里の田のきのさいもむむべきよ云々(奥儀抄) 三 「山里のされきのさいもそくべきよをいねらずとれふもくらいつ(八雲御抄) 廿一 魚部さい 「山田のさいもとるべきよといへり〇或号草俊賴號魚

**さい** 賽(万) 十六、十七、一二のめのみよのあらす五六三四さへあり雙六スウロク乃佐叡サエ(催馬樂) 大むりめのとろさいりくのさい云 五六がへりの一二のさいや四二のさいや(源 わりな) 下ノをぐるくうつ時の言葉よもありの尼君くとぞさいのこひれる〇賽の目の字音よてふるくひいひと覺ゆ **補** 職人盡哥合さい さいちりへのさいもめ候へいぬを物のいきめも候ぞ(和名) 四 兼名苑云雙六子一名六菜俗云須頭子 双六乃 久呂久 佐以

**さい** さいて 最果(枕) 廿八 さいさいての車よとべらん人のいりてりとくの参りもべらん **さい** さいひ(平家) 八 其外御娘八人おそしき皆とりとよさいさいひ給へり(源 玉葛) 九 此人のかくねんをろよ思ひ聞え給へるこそ今御さいさいひかれ(同 さうき) 八 西の

さいの姫君の御さいさいひを世の人もめでさこゆ(伊勢物) 百七。男の女に雨のふり



ぬべきよかん見煩ひ侍る身さいとひあらば此雨のふらトといへりければ(順集)十四  
 六かけまくもかゝこ死御神のあそきともめぐみ給ひてん云々(源帚木)七宮づりへ  
 一出さちても思ひりけぬさいとひとりいづるためトもおろりか(同(淨舟)十  
 昔を今も物ねんトてのとりある人こそさいとひの見えて給ふをれ補此詞假名書の  
 ものよは皆さいとひとのみありされと古言よのさ死とひとひつらん萬葉歌をも  
 てあるべ(万)五ノ云卅一虚見通ヤマトノミハ倭國者皇神能伊都久志吉國イツクシキ言靈能コトダマ佐吉播布國等  
 云々(同)七十一福サキヘヒイナナレト何有人香黒髪之白成左右妹之音乎聞イモガオトナキ○此福ヲ今本サイワイト訓  
 タルハ誤也サイハヒハサキハヒノ音便ナルコト五ノ卷ノ哥ヲモテシルベシサイワイ  
 モサイハヒト書ベシ(落窪)一それをさいとひよてもちるらむものぞとのさまへ  
 さいとひひと(源(淨舟)九いりあるさいとひ人のさそがよ心をそくてる給へるなら  
 んとあんな  
 さいよん(うつろ吹上)下ノこれらハ物の師さい人聲あり形あるものえらびさり  
十三  
補さいぞう(著聞)二十九いとそくやうをけかる法師ものゝぐいせで只大なるさい  
 ぞうをりり持て云々法師とりもあへぞさいぞうよてあそせて

さいかく 才學(源繪合)九さいかくといふもの世よいとおもくそるものなればよや  
 あらん

さいとづま(童蒙抄)春の若草をいへり(玉葉)春上常盤 春日野よまどうらさりき  
井入道

さいとづまつまをもちもいふ人やなき(後拾)春下 一野べとればやよひの月のそ  
義孝

つるまをまどうらわり死さいとづま哉諸集ノ由ニ此一(六百番哥合)一殘春左「うら  
宋葉

わり死やよひのべのさいとづま春ゆららむ成よるるな(能因哥枕)よ云さる  
シイキ

とづまともゆふ(万代)(夫)五(忠度集)一さいとづままどうらさりくみよ一の霞  
シイキ

かくれよきよをかくかり(夫)廿二「さいとづまうらさりしちめ一の志の  
頼綱

をせよきやよ出よとり○木下勝俊山家記ニ見ゆらぬ草のあやしきをバ名もゆり  
シイキ

しくてとふよこれのあかぎ花これのさいとづまなどいらへてかれ顔よこてるも  
シイキ

をり補(二條皇太后宮大貳集)「わりらるさいとづまとや春日野よのりのか  
シイキ

がみいざとづねとん(同)「さいとづま盛からねば白露のおけりめよせむことのみ  
シイキ

ささよ(待賢門院堀川集)ひとのとりわりき男のものいふ女いたくわくあといひ  
シイキ

けるがまさりてわり死男よあひよけるときよて男のよまするとてこひに「さい  
シイキ

たづま結ぶをたよわりせとてつのがむのべよねやのみるべき



さいそ 最初(枕)九<sup>ルモリ</sup>、正月一日のつとめてさいそよ鼻ひたる人(蜻蛉

日記)中さいそよ出てもろや一つ(宇治拾)六<sup>くち</sup>あその女よ具して行を見つけいふ

人もかゝる最初見つけつる女のみ見えければ(枕)二<sup>ノ</sup>又さふと死事道心

おろかりとて説経をといふ所よさいそにい死ぬる人こそ云々さやうの所よいそぎ

ゆくを(補)枕)五<sup>ノ</sup>さいそがよ歌がましくわれのとおもへるさまよさいそよよみ出侍

らんかんなき人のためいとをしく侍るあどまめやうよけいせれば

さいつころ(源わか紫)五かつの心をやれるをまひよかん侍るさいつころまうりく

たり侍るついで(補)宇治拾)六<sup>ノ</sup>おのれさいつころ狩をして

(補)さいづゑ(宇治拾)一おひつめられてさいづゑしてひたひをうちわられたりぞ

り(さいかむ(空穂 藏開)下<sup>ノ</sup>アテ君かゝる文見さればおと母宮さいなむとてあ

り入給ひそよとの給ひおむとて(同 櫻の上)下<sup>ノ</sup>七<sup>ノ</sup>いみづく笑ひ給ひてかゝる勘ど

うの仲忠こそいさいかまれめとて(榮 布引)卅人の娘のうづくをとなめいいでさ

せ給ひいミドろをいみさまのさそりを申せどもおやうをさいなめばみなま

ゐらせり(著聞)十一此方のあやよく制さいなまてたやまくもワレナありりせ

給とざりり(源をとめ)五御めのとゞもをさいかを給ふよ聞えんりさか(同

若紫)九例の心かゝのかゝるわざをしてさいかまるよあそいと心づきかけれ(宇治

拾)十一まめやうよさいなま給へば(催馬樂)何爲いりよせんせんやをいのかもと

いでゆるりやおやありくとさいかめとよぶまきためつやささんたちや(枕)十二

馬の命婦もさいかみてめのとりへてんいどうしうへたうと仰らるればかこまり

てお前よも出せ(補)落窪)一つねよいりわればさいかむことかざりか(同)おどろ

きさいかまんものぞ(榮 根合)いミドろてつよもあへまがくとしてさいかむ

(著聞)九妻をさいなみせとめて問ければ(和泉物)あのをらそのいりよさいかむら

んとおづま(源をとめ)卅朝臣のいつ死娘いたたてたらんなよのそぢりあるべ

きとさいなめ(補)さいらぐ(紫日記)ふやのそりせさうたちさいらぎるたり

さいるんのでい(伊勢物)三十むり西院の帝と申帝おそいまけり○淳和天皇諱

大伴桓武第三皇子天長十年二月廿八日讓位四十八先是天皇遷御西院承和七年五月

八日崩西院四條北西大宮東一謂淳和院(さいく(枕)五<sup>ノ</sup>いろくのさいくを物いそのやうよ彩色してつけさるなど(う



つ布 吹上下三。書ノ ことつづくも所さいく三十人をりりて沈をさうーさんあ  
としてとりてをさつくゑともかといろくにつくる(榮 御着裳) 十むりーかやの  
とこといふ人こそさいくいのとかりけれ(源 寄生) 八十ちさんーろがねこがねお  
どみちくくのさいくともいとおやくめいさふらひせ給へば(貫之集) 魚袋をつく  
ろせんとて細工は給へるを

さいまつ(うつ布 藏開) 中五僧四人僧かう四人のさいまつともいふり(蜻蛉日記) 下  
ひるまよ見えて御さい松といふ布をよぞあへる 云々(うつ布 祭の使) 十御せん御

さい松ともいたる兵衛のせうとも俄よ入に驚き見給ふ(同 嵯峨院) 八十ひをくらう  
かさんとして御さいまつもくらうあさせ給へば(同 國讓) 下二御さい松ともいわた

てもやる馬よのりをりまとしておさする御さまを(落く布) 清水詣さいまつのはれ  
かけよ人のあまたのりたれをよあらん〇さいまつつさいまつさいまつ皆同物也  
(うつ布 祭の使) 十おんさいまつともいたることらうよりをなみよ御まへむき

て(同 初秋) 六十御さいまつとりよ  
さいまぐる(枕) 八よくき物、ものがたりなごるよさし出て我ひとりさいまぐる  
ものすべてさし出るのわらひもおとともいとよく(瀧松物) 二さうくころの

さいまぐれたるやうかるが。長嘯子稻葉丹後守 朝の露よことなら夢まぞろーの  
世のありさまのいりよなりゆくよりあらん昔よりけよいとごまはくはかなくの  
み覚えてかまやまといもあれ彦の尊の我國をみそなむーかの虫のそがたよかよへ  
をこそあきつ島となんの給へるぞりーかねてのさいまぐるもぞおもへばかゝるべ  
りりたることのもーよありけん

さいけ 在家(宇治拾) 四十八近邊の在家にて  
さいご 最期(狹) 三ノ上僧詞 此尼君の最期は逢ひ侍らんを遠き修行ふとえつり  
うまつるまどけれを(瀧松物) 四あらたよふとかりー御最期なれ(同) 二十あらた  
よふとかりー人の御最期りな

さいで 裁出(後) 秋紅葉といろこきさいでとと女のもとよつかさして(同) 傷法皇の  
御服かりける時よび色のさいでにりて人よおくり侍りける(宇治拾) 四くろをま  
たるさいでよつとたるものをとらせたり(枕) 二十五 二あるえびぞめなどのさいでの  
おーへされて草子のうちよありけるをまつけたる(後) 秋下サイデハ裂出ナリ俗云  
タチハツシ也又裂袴タヘノ反テカトモイヘリ(榮) 七くれなるをさうのこ  
れうをき青うさかるなどさまよのいろのつやきらめきたるさいでなどをつくり



たるやうにみゆるぞ世にめでたき(圓融院扇合詞書)ニあらうをものゝせむこの  
すそでのさいでよつゝとて(宇治拾)十三、白れさいでしてあらをつゝみて

さいあい 最愛(うつろ 藏開)中ノ人の國よもさいあいのめもたるよあを云々

さいくく 所に注す

起七寶塔 さいくく(法師品)廿六藥王在々處々若說若讀若誦若書若經卷所住之處皆應

さいめん(承久記)上、白河院の御時北面といふことを始て侍を近く召使のるゝこと  
ありけるこの御時後鳥羽院又西面と云者を召おられけり(同)七、死よけあるわら  
もべなれを召住せれんとて西面よぞおされける

さいい(空穂 田鶴の村鳥)廿老たる親ちみさいいの泣りかゝふを見給ふるかん  
くれあるの涙なぐれてかゝり侍る(源 帚木)廿なつかいさいいとうちたのまん  
よ無才のひとあまわろあらんふるまひかぞ見えんよ云々○妾をさして妻子と云

こと唐人の俗語よもシカイヘリ(盛衰)九いりなる人のさいいならんと行末みたく  
おもひけれを(源 若紫)五深き里の人をなれ心をくわあきさいいの思ひわびぬべ  
きよよりうつ心をやれるをまひよかん侍る

さいい 財資(うつろ 嵯峨院)七十こゝらの年比おほやれよをてられ奉てさてさいい  
を賣て世々よのあうとびいさめをとて

さいいト 際次(枕)十一御ひたひあけさせ給へるさいいト御とけめの御ぐゝのいさゝか  
よりてあるく見えさせ給ふあさへぞきこえんかたあき

さいいトん オ人(源ととめ)十事もて、まりづるをりせさいいトんどもめして又々文つ  
くらせ給ふ

さいいさ 彩色(榮本の車)卅。女房共ノ法華經ヲ書寫シテ 只今御身ども云梅檀沈水  
一。御堂ニテ供養ノ中講師カ詞

よあみりへり御りやいろくよさいいさ給て鏡ようつれる影を見給て云々(彩色  
言ニイヘリさうさて  
トモ云類ノ格也)

さいいさ(枕)五、いろくよさいいさをものいこのやうよてさいいさつけたるかど  
もめづらうく見ゆ

さいいもん 祭文(枕)十、詞をめけなる物、宮のめの祭文よむ人

さいいもく 材木(うつろ 吹上)上、是とう黒りい唐桃あといふ木どもを材木として(宇  
治拾)十二堂を造り塔をたつる最上の善根かりとて勸進せられたり材木をば播磨國

よ行てとられけり



さいす 祭主(和泉式部集)二このかたいたるとりてをさいを輔近りりてかへすとて  
かりのこをいれて

さは 多(空穂 菊の宴)上ノあて宮「あた人のさはよつとつゝをれる色は何よあやあ  
く思ひいづらん(神武紀)十比苦磋破入をりとも(同)十一多(万)二ノあづまの國  
またり山いさよあれども(同)十八ノ國がらもさのよあれども(古事記)中忍佐加能  
意富牟盧夜爾比登佐波爾岐伊理袁理(万)十八ノ國のまらら山もも佐波爾於保美  
等

さい(源空蟬)六いりでりさはもべらんかうよの木丁をへて侍ときこゆ(同夕顔)  
六例のうるさき御心といおもへどさは申さぞ(同)六(木)四十いりぐのさぞ申さんと  
いふよ(同)四つなぐぬふねのうきたるためしもけよあやなしさを侍らぬりといへ  
ば中將うあづく(枕)七あどさぞおくせしよりをべておもてさへあかきてぞおもひ  
みたるゝや(補)狭(三)一行りへりたゞひさみちよまどひつゝ身の中をらよかりねと  
やさそ(宇治拾)六たゞそれをとるべしといへを鬼よりてさいとるぞとて云々(著  
聞)十六さてのさい何事を  
○さいいへど(うつは 俊蔭)四十我今よりまさりていみどきめをいつりこむさい

へどかくをりりよやのありつるおれおを限りかめれとおもひて(同)三ひとり隠れ  
る計の屏風木丁きる物計さいいへどもひろりり所のをでりよかくかりぬとそ  
れど猶一つらひてあり(とりかへそや)廿御ありさまあどさいいへといみどきこと  
の八の君たちよのよさせ給ひせ(源紅葉賀)廿をき心かゝと常よもてあやむめるを  
さいいへどをさざりけるいどてとらさせ給へば(同)玉葛)二十むせめたちさいい  
へどこゝろづよくとらひて

○さいいへど(源朝かほ)廿君こそさいいへどむらさきの故こよかりら物一給ふめ  
れど

○さいありども(狭)一ノ上下をたれりけ給へるのやんぞとあき僧よこそのおそは  
らめさいありどもあそいおしとめて云々

さい(澤)拾戀一、九條「さよまの年へぬれどあゝさづのこゝろの雲のうへよ  
とこそ(六帖)五(後)戀三「あゝたつの澤べよとゝいへぬれども心の雲のうへよ  
のここそ

さい(源浮舟)六さを心見んよ注さらさかり(うつろ 俊蔭)五十此猿むつあゝつ引つ  
れてさまゝの物のそをくぞてよさしてあひ栗柿をいもどころかどを入れてもて



くるを見まふまいとあされまさをこれまよいかされてあるかりけりどめづらり  
 まおぞさる(源常夏)三 見るまゝいとあいきやうづきりをりまさり給へま猶さ  
 てもえまぐまどくおぞかへさるさをまたさてこゝかからうづきまゑてさる  
 べき折々まそりかく打忍ひ物をも聞えてかぐさとかんや(枕)二ノさまよりかん  
 とてりへり侍るを(源蜻蛉)一侍従の君よび出てさを参り給へといへ(拾)物「あ  
 りせしてごかるゝ人のまむ里へさバリのとめる山のおあたり(源桐つは)九車より  
 おちぬべくまどひ給へまさをおもひつりゝと人々もてわづらひきこゆ(榮衣の珠)  
 四やがてかぎりまなり給ひぬまされこそかぎりの御事なりけれとまよまきの  
 のしり(源帚木)六 四十よしさをなまなり給ひそとむつかられて(新古)秋下守覺「身  
 まりへていざさを秋をゝみゝんさらでももろき露の命を(山家)上「山のまれば  
 まむけしきにしるきりな今朝よりやささを春のあけぞの(新後)戀五、二條「今のさを  
 何まいのちをかけよとて夢まも人の見えま成らん(新古)西行「おろちかる心のひ  
 くままりせてもさてさばいりまつひのおもひ(同)釋教「さらぞとていく世もあ  
 らトいざやさば法よりへつる命とおももん(枕)十一、こゝま三人いとよく見侍ぬべ  
 しと申せまさをとてめゝあけさせ給へ(同)十二、まくらまこそいゝ侍らめと申し

りまさをえよとて給ませさりゝを

**さば** 婆(源)上、八 さをのちりの岸まいたりてとくあひみんことをおぞせ

**さむ** 散飯(狹)四、下 嵯峨の院の御心ちなやましく覺しめされてはまへまけれどかく

こそなど人まもの給ませ抄病ヨロシキ寸モ也うちまへさる御ときも御さをまどらせ給ひ

云々 阿彌陀佛まむりひ聞えさせ給うて云々(語燈錄)十五、齋のさばまの菜をゝ候べ

きり齋の生飯をバ屋の上まうちあけ候べき(左經記)長元四年云々齋院女房云朝

夕御膳散飯等座野宮時奉難良刀自神(禁秘抄)上、一 只御膳二度只是女房サバマカリ

取之云々また云々取左波立箸(盛衰)三十 木曾の散飯のちりまの何ものこさむくひ

おもんぬ(江次第)八、一 以始木箸立御飯上毎供可取三把歟(枕)十、さわがしき物、鳥

のときのさばくふ(盛衰)四十 散飯たおやりにとりて佛前ま備へて其後ま参らむ

**さそり** (万)十二、一 湊入のあゝわけ小舟さそりおそりまおんまを不通と思ふお

(源胡蝶)七 さそりあるままりであと給ふ(竹取)御命のあやふきこそおぞきなる

さそりなれば(大和物)五十 同一院まありける女さむることありてあまざりければ

(大和物)五十 秋の野をまくらんゝりもまろごとくまけささそりまねをまなくら

ん(圃)万(四)十六、一 瀬ま千たびさそりまひゆく水の後まあまむ今からまども(同)



十七あしびきの山野さむらぎあまさくるひなをさむる(續千) 堀川「長さよまよふささりの雲をきて月のまほを見るよしもがな

○ささりどころ(源 浮舟)五ながらへて人わらへようき事もあらんいつりその物思ひのさえんとせるとおもひかくるよのささりどころもあるまとう(狹)三上おろけあらぬころざいのそとよのけよこそ山のけりもささり所なきわざよ侍りけき(源 わけまき)十たれは屏風をそへてぞおとせる云々かくほともさきものへたてをりりをささりどころよて(同)十かうころがそうあさましき御をとりまをいたらん人のささり所あるまうけかるを我からでさづねくる人もあらまうりばさてやゝなまゝ

ささり 月水(和名)三月水俗云佐波利風雅(神祇)「もとよりもちりままうさる神をれば月のささりも何りくるしき是の和泉式部熊野へまうでたりけるよささりよて奉幣かかそざりけるに「それやらぬ身のうき雲のさびきて月のささりとあるぞかか

しき云補うつほ(國讓)上、一「さちぬる月よりのささりものし給のせかやと給ふあり

ささり(源 夕顔)四さておそこのおなれかまよもささりなくむまれまよめ(後)離別「おもひやるころささりりいささらトを何へたつらんねのあら雲(六帖)三直轉

「あせきよもささらざりけりもとぢをり落くる水のいろとえつ(同)二「ちとやふる神のいぐさもこゆる身の草の戸さしもささるものり(同)二(新撰)「とふ人もなき宿かれどくる春の八重むぐらよもささらざりけり(拾)戀(六帖)一(万)四

一四「いそのりもふるとも雨よささらめやあそんといもよひひてし物を(高光集)四すけまさの朝臣をかたらひわさりてどのいいたる夜もるともよひひてささる事やありけん見えきたらざりければ(後)戀五よみ「いふからまづらさをまさる秋のよれ草の戸さしよささるべしや(拾)秋能宣「もまぢをけふのかは見んくれぬと

もをぐらの山此名よのささらト(大和物)百五「まづからこそいとまもささり給ふ事ありとも御文をよ奉り給おぬ心うきことなどこれかきいふ(堀次)「都人戀しきまでもおとせぬいなこそその關よささるよやあらん(蜻蛉日記)中「あそれこれよまゝ

さる雨風よも古の人のささりたまささんめりしものを(同)同ひた心よかくもかりつべき身をそこよささりよてあるをいゝせん(竹取)霜月をさすの降氷みか月のてりたたくよもささらざりけり(同)天下の事いとありともかゝりとも御命のあやふさこそ大なるささりかれをほつらうまつるまうき事をまありて申さんとて

(源 帚木)九「やとおびぬれ顔よきぬのささりて音よもたて(土佐日記)「まなを



こ此月のうへよりこ舟の竿よさるのあつらなるべし(重之集)廿(新古)戀「つ  
くを山と山一々やま一けしをと思ひいるあはさるざりけり(元輔集)八「あま  
よりつなでの舟此さそりおそるのりて行べきほどのるけさ(伊勢集)廿(後)冬、よ  
し(六帖)一「せきこゆる道といか一ちちかからと一よさそりて春をまつりか  
(貫之集)三(朗詠)(續古)夏「時すきばさかへもいさくおいぬべし雨よの田子もさ  
そらざらん(兼輔集)六雨ふるとてこぬおと、いをうらまければ「おもふことか  
らせながらよ世中よふれをや雨とわがさそりけん(敦忠集)廿「よとよもよそれぬ  
涙よさそりなまよそよのこふる身とやかりなん(齋宮女御集)八「こりれゆくほ  
の雲井よへたつともおもふこゝろの世よもさそらト(貫之集)下ノ「ことと思ふこ  
ころのなきを櫻花ちるとまがふよさそるなりけり(順集)四十「いとまのひまよから  
の歌つくり大和哥よむ大方りきあつめさる侍従成信さそりありて(大和物)六十  
と一子雨のふりける夜ちりぬをまちけりあめにやさそりけんこさりけり(後)戀雨  
よさそらせまうできてそら物かさりかど一ける男の(源わか紫)四「立とまり霧の  
まがきれすぎうく百草の戸さよさそり一もせト(同蓬生)廿三月入りたよかりて西  
のつまどのあきさるよりさそるべきわさとのどつやもなく軒のつまものこりか

ればいとあやりよさ一入さる(枕)八ノけふの雪をいりよとおもひきこえか  
らあんでふ事よさそりその所よくら一つるよ一などいふ(うつは嵯峨院)廿花ざり  
りよもどかくさそりてものせせかりよ一を(空穂吹上)下、さふらとんと思ふ給へ一  
を手づりひの事をとそべり一りバそれよさそりてあにいそぎまうのやりよ一(宇  
治拾)三ノかゝる雨よいりよかといへバこれよさそらんひむたよあさき事よあをか  
どいひかそ一ける(源桐つは)三月かけをりり八重むぐらよもさそらでさ一いり  
たる(同蓬生)七柳もいたう志ざりてつひちもさそらねをみたれふ一り(万)十六  
「人言のまよどこちたくなりぬともそこよさそらんこれならかくよ(榮衣の珠)廿九  
「思ひやる心をりりのおく山のふりき雪よもさそらざりけり  
さそること(土佐日記)十日さそることありてのぞらせ  
さそりり(源うき舟)五左の大殿さそりめでたき御いきほひよていりめ一うの、  
しり給ひぬれと(同帶木)廿一ひとへようちこのとらんりこのさそりりよてあるべ  
くなん(同桐つは)二いろよもいたさせ給をせなりぬるをさそりり覺一たれと(同  
帶木)五いとさそりりからんあさりよこれりひすりされよりせべらん  
さそり(源夕きり)七よその人のもりきれども親よのかくすたぐひこそひわり一も



のがよりおもあめれどさそらおせされせ

**さそら** 澤田 (好忠集) 「ねせりつむ春のさいたにおりたちて衣のすすのぬれぬ日ぞなき

**さすれ** (落くほ) 一いりよせんととび給へばさすれあけ給へ(源 帚木) 五めさましく

つらけれどさされとおせせとさもえおせしまつまどく(宇治拾) 三ノなんぞう雀か

とるゝとてよくとわらへどもさされいとちいければとて飼ふちとよ云々雀のもの

えて賢まし給ふとて子どもわらへばさされ植てとんとて(榮 布引) 十後の世のこと

さまさけらればこそあらめ此世のさされとておせしめしかづりせ給ひける(源 さかき) 六

この事もらし侍らし補 (源 竹川) 三いでやさされや今の限りの身かれ(同 柏木) 十

身の心うき事をかゝるよつけてもおせしいれをさされ此ついでよもしあをやとお

せを(落くる) さされおせせ給へとてもろともよ入給ふ(和泉式部物語) 御心よも

いとむつりしうおせしめをさされくるしうもなし(うつろ 櫻の上) 上 九さされいと

うれしき夜りな **さそらり** さわふ 考ふべし かカ (源 初音) 六物おもひよしづと給へるちとのおそさよ髪のを

そそこしほそりてさそらりよかゝれるしもいと物きよけある(細) アラノトカ、

リタル也(師) スコシヌクナキサマニヤ〇眞淵云小疎也(万) 八ノ秋萩のうれわゝら

さといふわらし同し〇然ればさそらりトモアグベシ又その濁のわし通へばさそら

りよてもよし(枕) 二ノ小舎人のちひさくて髪カのうるそしきぐすと髪ノさそらりよ

聲をりしうて(源 初音) 九けざやりある髪のかゝりのそこしさそらりあるほどよ

そらぎよけるもいとよかまめりしさをひて(同 椎か本) 四十髪さそらりあるほどよ

おちたるあるべし末そこしほそりて(加茂保憲女集) 春ののどけき池のほとけの花の

間と心のそとさそらりよ補 (源 東屋) 八めをささまよさそらりよあさりしある

べきかぎりしある所を(枕) 二ノかみのうるそしきぐとをさそらりに(狭) 三かみの

云々さそらりあるさがりさかどあてやりよ(同) 三御ぐしのかゝりたるほどさそら

りよ **さそく** (壬二) 「かゞり火のそやせよくだを鶺鴒おねさそくよかその影ぞとたるゝ

(夫) 八 忠基 「鶺鴒舟ちりふよかそをさそくととどしぞかぬるよそれかゞり火(同)

(同) 八 同よみ人 「かゞりびし手繩のかぎをくりかへしさをきてもかほありぬふちりも補

(吉野拾遺) みか人をりしがらせ給ひてかんちあををさささかんやとのたまそを



ささくり (著聞) 七 此馬場にて云々 勝負の躰かどをささくりつるを (頼朝佐々木定

綱ニ賜狀) 智惠深き京人どもよ心ぎをもええなられて居ることいふことも何

さりの事りあらんかどささくりええらるまよきかり (白氏文集) 廿七 捋白鬚

さそや (空穗 祭の使) 卅 くりやめくろきまのいけよいてさそやけのゑるしても

てきたり (和名) 七 温菘 和名古。サハヤケノ (拾) 物 春風のけさそやければ鶯の花

の衣もそころびよけり 訓ナシ 名 春風のけさそやければ鶯の花

さそ (つれく) 百八十。アカリ障 後のさそく、とそりりへんとおもへどもけ

ふさりりのわざとかくであるべきあり (著聞) 十 馬の前よの草一把もおりせさそ

さそとそりせてぞありける (源 總角) 四十 ちらざりしさをよさほく、といえあき

らめたまそで

補 さそめく (應神紀) 處々海人訕詭之不從命 訕詭此云 作麼賣玖

補 ささむる (万) 五 春さればさへへの里のかはどよのあゆてさばる君待がてよ

補 ささる (ぬ) (頼政集) 一 君よあひてかへりよより昔せし戀よさよたる物をこそ

思へ「かくしあらさそやどをまよそのかえれあひよのさほにぬ我おもひりか

補 さよこそ (榮) もとの車 廿 さのさよこそいとさためさせたまひて

補 さほりせ (万) 六 一 わがせこが着衣うはさそ風にいさくなふきを家にいさるま

で (好忠集) 一 わが家の行なと、ほしは風の志をいをやめ妹よまつらん

さほふ 作法 (源 桐つは) 八 限りあれば例のさほふをさめ奉るを (同) 同おさぎとい

ふ所よといりめうそのさほふたるよ (うつろ 俊蔭) 上 舞人陪從例の作法なれ

ばいといりめうて (同 嵯峨院) 七十 御うぶやいとよなくとあろよより御うぶや

いなひ例の作法あり (源 御法) 十六 いらめいささほふあれといとそりなき煙よて (同

少女) 八 座につさならびたるさそふよりとめ見もいらぬさまどもあり (禁秘抄) 中

一 廿 仍付万事存華族作法失禮 (同 夕きり) 廿 常のさそふあやまらぬ (宇治拾) 三三 どり

べのへるていぬさて例のさそふよとかくせんとて車よとりおろは (源 あふひ) 二

男よてさへおそれればそのそどのさほふまぎと、くめでた

さほふ (枕) 三 五 ともすめのさそふくこまいぬ大志やうとあどめてまゐりて

さそひめ (六帖) 五 五 みる人 (新勅) 春上 一 さそ姫のおりけさらはうをそたの霞たち

さる春の野べりか (頼政集) 十一 一 けふぞさるさぎさり山の白つ、トいりでさそひ

め染のこしけん



さずは(曾丹集)三月一山姫のそめていさずは衣りとみるまでよほふ岩つゝトウカ

(同)初秋モ「田子のうらよきつゝ、かれけんをどめこが天の羽衣さずはらんやはいつい(夫)

を(夫)四院大輔「玉川やをちの砧よからはかりこやさずはるてつくり此布(夫)

五春雜曾丹モ「さゝ泥つきまきり泥さずせり春をよえりさけはなつが志わざる

ら(好忠集)「秋風のふくさ衣をとりみたりさずは花のをせよき(散木)「そめり

長明「白たへのまそ糸をくりさらし籬よさずは花のをせよき(散木)「そめり

けてまが泥よさずはふちをりままど泥も鳥のふと散たりか(待賢門院堀川集)「山

がつのみちよさずせるあせり泥よいとそけある玉柳りか

さへ(源末摘)十まけていやま下の御心さへそひて命婦をせめ給ふ(同)帶木廿さ

がよわがとてん後をさへかんおもひやりうしろみさり(同)桐のは三この君さ

へりくおそそひぬれば(土佐日記)「いのりくるかさまと思ふをあやかくもかも

めさへたに波とよゆらん廣足云守部説古戀三「うつゝにいさもこそあらめ夢よ

さへ人めをるととるがとびいさ(源帶木)十いとあそれになしく心ふり泥こと

かなと涙をさへなんおと侍り(古)春上よみ「梓弓おして春雨けふふりぬあは

さへふらばとらなつてん(源うつせみ)初涙をさへこずしてふりさり(同)夕顔冊

こよひもさふらそめいよさへおこさりつるを(同)あふひ六ところトの御さ

トきおゝろトよあつくしさるしつらひ人の袖口さへいとトき見ものなり(古)秋

貫「さ泥そめし宿しかそれバ菊の花いろさへよこそうつろひよけき(同)冬

年のをしくもあるりかまは鏡とるけさへよくれぬとおもへを(同)戀二「住江の

さしよる浪よるさへや夢のりよひぢ人目よぐらん(同)戀三「かぎりかき思ひの

まよよるもこん夢路をさへ一人のとがめト玉霰論あり(玉葉)冬行「木がら

しよ木の葉のおつる山里をかみたさへこそもろく成けれ(新後)雜中「ういとのと

いとふさへこそ哀なれあるものとやい身をおもふべき(万)七「ますらをの弓すゑ

ふりおこしかりさりの野べさへ清くてつゆくよりも(拾)雜春よみ「あさけよき年

よのあれども驚れなくねさへよのかさらざりけり(玉葉)雜一「いりさかりつゆい

けいれバ東路のことのささへよ袖のぬるらん(同)堀川「おくれるてかまたさへこ

そとまらね見しも聞しものこりか死世よ(古)戀五「今のとてはが身いぐれにふ

りぬればことのもさへようつろひよなり(後)夏よみ人「けふよりの夏の衣よかり

ぬれどきる人さへのかさらざりけり(貫之集)上「年のうちよ春たつことをかまが

野のこりかさへよもりよけるりか(拾玉)二「かがめやる心さへあをそれやらね



あそここめふるあそぢーま山(後) 戀二 延喜御製 「よそよのみまついそりを花をみのえ

此ゆきてさへこそとまくわしけれ(金葉) 賀 國行 「おのづからとが身さへこそいそ、

るを君が千世よあそまそしきよ(同) 戀下 顯輔 「こひわびてねぬよつもれはまきさへ

のまくらさへこそうとくかりけれ(貫之集) 「鶯のさむつ、おけは春雨よこのめさ

へこそぬれてえけれ(後拾) 戀三 良基 「わをれかんとおもふさへこそ思ふ事かそぬ

身よのうかはざりけれ(同) 戀二 師賢 「かへりーのわがみひとつとおもひーをなごさ

へこそとまらざりけれ(同) 雜三 國房 「おもひやる心さへこそさびしけれ大原山の秋は

ゆふぐれ(御堂蘭白集) 「君がためをのへは松をひく春のことのねさへよ千世とあ

そかれ(山家) 上「何とかく心をさへよつくをらん我なけ死よてくる、秋の順

集」深とどり松よあらぬあさあけの衣さへよぞーづとそめけん(源 あふひ) 廿若

君を見奉り給ふよもかよーのぶのといとゞつゆけ、れとかゝるりさみさへな

らまーりバとおぞーかぐさむ引「結びおくかさこのこたよかりせばあよーの

おれ草をつま、ー 廣足按本歌のたよの心を詞にいさへといへり 少し意ことあれど意味相通ふあり深く考べし

さへづり(源 玉葛) 十色あひ心ちよけし聲いさうかれてさへづりあたり(同 松風) 十

「古里よとー世の友をあひとびてさへづることを誰りよくらん 言ナ琴ニ (阿佛うと

たね) 蓑笠かどきてさへづり来る女あり(源 浮舟) 廿きいのあら、りある七八人を

のこともおほくあかトーからぬけそひさへづりつ、いりきされバ(古) 春上よみ

「百千鳥さへづる春の物でとよあらたまれども我ぞふりゆく(源 常夏) 廿いとよけ

よ今すこーさへづればいふりひかーとおぞー(古事談) 講説之間梵語ヲ囀レリ

○あまのさへづり(源 松風) 廿鶉りひとめーたるよあまのさへづりおぞー出らる

(同 あか) 六あやしき蟹どもあどのたかき人おそる所とて集り参りて聞もあ

給もぬおとゞもをさへづりあへるもいとめづらうかれぞ

○からうたさへづり(土佐日記) 此をりよある人々折ふよつけてからうとともさ

へづりうたふ 時あにつあひしき といふ印本稿本

さへづる鳥(源 紫) 十明ゆく空のいといたうかきて山鳥ども、そこをりと

かくさへづりあひさり

さべう(榮 月の宴) 一さらぬいさべう御物忌かよてつれと、よ覺しめさる、日を

どのお前よめー出て(同 花山) 七すべてさべうおそーまをと見えさせ給ふもかな

ういみとうおがさるれど

さへのかと(和名) 二道祖 和名、佐倍 乃加美



さへて(枕)十六 さへて一櫛とぐくほどよ物よさへてをれたる

さへて(土佐日記) これをみて業平の君の山此もよけていれどもあらなんといふ  
哥かん覺ゆるも海までよまゝ一り波立さへていれどもあらかんとよよとてま  
一や(六帖)四 一人のこゝろをいかゝたのまん一手をさへてよ野の瀧のせきつと  
も

さべき(源は一姫)十こゝよいさべきにやたゞいとひをかかれよとことさらよ佛かど

のそゝめおもむけ給ふやうなるありさまよて(榮つほみ花)六 さべきおくり物など

おどろくゝうおきてさせ給ひて(同さまく)八 やもめよおをればさべき娘も

給へる殿原かどけしき立聞え給へど云々

さへぎる(朗詠)三月三日、牽流過手先遮

さと(源幻)十 おどろくゝうふりくる雨よそひてさとふく風よ灯笼も吹

まどのいして空くらきこゝちをるよ(同開や)三 せ死やよりさとをづれ出たる旅をが

たどもの(同竹川)十九 ちよるけむひの花よりもゑるくさとうちよほへれを(同螢)

六 御木丁よかたびらをひとへうちりけ給ふよあもせてさと光るものよそくをさ

出さるゝとあされたり(同浮舟)五十。右近殿の物のけしき御覽とさるべといふ

よおもてさとありみて物もの給もせ(落くち)二 さとよりてひとあゝづゝける(枕)

五 曉かうし妻戸などおしあけさるよ嵐のさと吹あさりて顔よみたるこそいみ

うをりしけれ(源あふひ)廿 風あらゝりよ吹ををささとさるよと(同にはふ宮)十

おまへちかき梅のいといたくほころびにせられたるよほひのさとをりわたれるよ

(同末摘)十 松の木れおきりへりてさとこがるよ雪も(同葵)四十 おまへなるおとを

おどかしき人をいと哀しくてさとち泣たる(枕)五 ましてさと一度よ笑ひあど

いたるいとおそろし(源柳)廿 御ぞのつまを引からし給ふよもひとるくさと句ひた

るよ(狭)三下 いひいらせりうをさしき句よのつねの限よあらせさとくゆり出さ

るよ(源野分)四 さとうち句ふ心ちして(同蓬生)七 風につきてさとよふがなつり

しく(盛衰)卅 東のくがへさとのせり(源楨柱)五 火とりを取よせて殿のうしろよ

よりてさとといわれ給ふ(枕)五 ましてさといちどよらひあどさるいとおそろし

(狭)三 さとよほひ入たるおひ風も(空穂祭の使)卅 ひとさびよさとらふあゑのを

さと(源桐つは)卅 そのよおとゞの御里よ源氏の君まうでさせ給ふ(同帝木)三里

までも我方のいつらひまをめぐして君の出入りたまふようちつれきこえ給ひつゝ

(源末摘)三 是は父君のもとを里まで行きよふ(新古) 雑中一岡のべ比里のあるト



をたづぬれば人のこたへせ山おろしの風(尾張家裏)岡のべの里との岡の邊よさゞ  
一つある家をいふ此例山家を山さど、いふが如し

さどもなれ 里離(源松風)十こゝよもいとさとどもなれてわららんよもかたきを

さとさう 里坊(盛衰)七十正月五日文覺上人の二條のくまのさとさうまおちつき  
給ひて

さとどほし (源松風)十八いりぐまをべきいとさとどほしや(元眞集)卅「里どそみいり  
よせよとりかくのみいそいもみねバ戀しかるらん

さとどかり 里隣(宇治拾)三五おうかよろこび興して里どなりの人よもくせせとれ  
さもとれさもつきもせせおほりり(同)九ノ佛くやう奉らんとて云々里どかりわ

たくしものもかひあつめてさふらひつるといへを(同)三十のいさりひをさる  
とて里どなりの人市をなしてさけれバ

さどり (仁徳紀)廿何死人之無知耶(玉葉) 釋教 頼舜「ひとふさを折てたむくる花のえま

さどりひらくる身とぞなるべき(源はし姫)十内けうの御さえさとりふりく物し給  
ひけるりあ(同)あらし六物のこゝろをいりさうりさゆくさきのことうちおせえと

やうくやとさうとさうさどる人もなし (新拾) 釋教 良覺「身をさらぬ心の月のわく

らそよすむぞさとりのそとめかりける(拾玉)四「法よあひてよよありがたきさと

りあり心よいひて人よかさらト(隆信集)「いりからんよのよれ夢のやとされてさ

とりひらくん山のそれ月(同)「ひらくあるさとりの花よの中のでりよまぬ  
もちねなりけり(新千) 釋教 行濟「露の身れおき所とてこのむらささとりひらけし花の  
臺を

さとがち (源桐つは)二ものこゝろをけし里がちあるを

さどかぐら 里神樂(新勅)神祇 慶算「里のぐらあらしるるよおとづれてよそのねざ  
めも神さびよけり(玉葉) 冬入道前 太政大臣「山もとやいづくとらぬ里かぐらこゑる森  
のこやるあるらん

さどかれ 里馴(拾) 雜春 輔親「あし引の山をとぎに里なれてたそがれ時よ名のりそら  
しも

さどむら 里村(宇治拾)一里村のものこれをとりにて人よもこゝろさし

さとうつり (宇治拾)廿九家の具足ともおふせもさせておのれももちて手まどひ  
て里うつりしぬ

さどる 里居(枕)廿二御里居いと心うし云々いんどき事ありともかからささふらふ



べき物も覺しめされたるかひもなくなど 云々(源玉葛)廿九かとりさどるのひさしく  
つる(榮つほみはる)三月比ひさしくかりあける御さどるいとようまちつけ聞え  
させしを(源すゝむ)十月夕はおそやけさまよて限ある折ふしの秋好御さどるも  
いとよくまちつけ聞えさせしを(枕)十二つれとあるさどるの布と書あつめ  
たるを(清少)ナリ

さどとこ(鎌倉右大臣集)下「さどみおぐとめたてざのそよくまかびきおきふ  
しよや世中

さどし(源わかし)十君おぞしまむは夢うつさまとづりからせさどしのお  
うなる事どもを死しりたゆく末おぞし合せて(榮花山)卅世の中正月よりころの  
とりあらせあやし死ものさどしかどあけくて内よも御物いもがちよておし  
は(源あらし)三使ノ京よも此雨風いとあやし死物のさどしかりとて仁王會かど行  
ゆるべしとなん聞え侍りし(万)卅二「つるぎさち身よとりそふと夢よみつあはの  
さどしども君よあそんさめ

さどし(源桐壺)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

さどし(源)六世よあらせさとうかしくおのれればあまりよおそろしき  
まで御らんせ(同紅葉賀)八いとさとくてかた死調子どもをたゞ一とさりよからひ

俗ニ云ス、  
ドキナリ

補(源浮舟)六十里びたる聲

雑三「さとびたるいぬの  
定家

枕九かぎりなくめでしと見しらぬさとびひちまのいり  
かゝるひとこそ世よおそしめしけれとおどろりる、までぞまもりまらる

源夕顔卅となりあけくどがむる里人おそく侍らんよ(同花の宴)八御り

白馬とんとて里人の車きよけよしたて、みよゆ

山吹の花のさくりをるでよきてこの里人よかりぬべきりな

里姿(空穂)初秋)下七。仲忠ノ母御門 かくさふらそはべりけるをけし

源氏の君のうへの常にめしまつせせバ心をくしりせむ

幸(古事記)一山佐知母己之佐知佐知海佐知母己之佐知佐知



さりどからばサウナル(源薄雲)三。阿ガシ心紫へおひさ死とは死人の御うへもつ  
ひよとかの御心よかゝるべきよこそあめれさりとならせけよかう何心な死不どよ  
やゆづり聞えまよとおもふ

さりどころか(仲文集)廿「ことわりや今夜の罪のそよよとやいれよふいなんさ  
り所なり(源空蟬)十人のおももんことさり所なきよ

さりとして(宇治拾)八、さりとしてあるべきからねバ(源帝木)四十さりとしてうちとけ人  
けなきありさまをよせよてまつりて(同若紫)廿七をつくりくらくさけよさりとして

うちとけ(新古)戀四攝政「我をよもよめて袖よやどれ月さりとして人のよけ  
いとえねど(古)戀一よみ「戀をればよが身ゆけとかりよりさりとして人よそそ

ぬ物ゆゑ(拾)戀四伊勢「もろりあるやどよもりよふこゝろりかさりとして人のよらぬも  
のゆゑ

さりとても(源早蕨)七さりとても又せめて心よそくよへまもりてもよけりるまど  
く

さりとも(能宣集)七(玉葉)三「さりともよこの心よそりられてよなれぬ物の命  
也けり(竹取)さりともつひよ男あひせざらんやよと思ひてよのみをかけよりあな

がちよ心ざよをみえありく(同)此めのわらよ絶て宮づりへつりまつるべくも  
あらせ侍るをもて煩ひ侍りさりともまりりて仰せ給よんと奏す(源あつま)十五世

の中の心うさをかきつらね涙もおちぬさり思ひつゞけられて云々さりとも人に  
いおどり給よとといおもひなきさむ(同桐つは)七限あらんよちよもおくれさ死よ

たよと契らせ給ひけるをさりとも打よて、いえゆきやらよとの給よをるを(同帝  
木)二あま人わろくつめくよるれよさりともこよひ日よろのうらみよとけなんよ

おもう給よよ(同わかち)上七いまいさりとも佛神をよのよ申てなんうつろひけ  
る(新後)戀二二品親王性助「さりともよおもふ心よよふるよつらきよよえぬ契ありよ

り(新古)離別「さりともよあふよをたのむ哉よでの山路をよえぬわられよ  
さりぬべき(源帝木)三さりぬべきよこよいよせんかよむなるべきよこよとゆるよ

たまよぬよ(同花の宴)四よよさりぬべきよまよやあるよ藤壺わたりをわりなうよ  
のびて伺ひありけよ(うつほあて宮)三。姫君を二條院よ「末遠き二葉の松よひき

わりれいつり木高きかけをみるべき、えよいひやらせ  
さりがたき(源わらな)下十一おやよすてつよもさりがたき御るうの内よいまづこ  
そのよ哀れよなんなど(同夢浮橋)十よのよよけあき身よとつをよまがよおやよた



るがさりかたれ不たしおぞえ侍りて補(とりくへとや)一玉ひりるをどこ君さへ  
うまれたまひしりばまたかくさりかたれものよおもひきこえ給へり(万代)夏  
「さなへとるふりたよわさるいあふねのおりとつことこのさりかたれりか」  
匡房

さりながら(源 早蕨)五さりあがらも物よ心え給ひておけりしき心のうちも

さりや(源 薄雲)八。あかしえもいひやらせいとどうかけば源さりやあかくるしと  
おぞして源「おひをめしねもふりければたけくまの松よままつの千世をあらべん  
心

(同 玉葛)卅 年へぬるとちこそ心かそしてむつびよかりけれとの給へば人々忍びて  
わらふさりやたれりそのつりひからひ給もんをむつからん(花)サリヤハソレヨナ  
ドイフコハロ也

(同 寄生)四十 きたれのしたよりやをら及びて御そでをひりへつ女さりやあか心う  
と思ふよ何事りいそれん物もいとせいとひさいり給へば(同 すま)卅 哀とおぞ  
しいりての給もさるよつけてろくくどこぞれいづればさりやいづれよおつるよ

りとの給もせ(同 うす雲)卅 むつりうて御いらへもおければさりやあな心うとて  
ことくくよいひまぎらそ給ひつ(とりかへとや)一すのめりしきこえ給へかどの  
給ふ不どよ中納言おそたりさりや夜をたよふり給もぬさまよ此人の御心おろ

りよあそくくからましくばいりよむねいたあらま(同)一いらへ給もさめれば

さりやいとゞおぞしのみこそうとませ給ひまけれ(源 末摘)卅 さへづる春のどから  
うとてこかしく出たりさりや年へぬるるしくと打笑ひ給ひて(同 浮舟)四十 上

のかめしとおぞさんかんわりあきとたいふが娘のりさり侍りしといふよもさりや  
ましてと君の聞ふ給へり(同)六十 おそれ申侍るといふをきくよ梟のかりんより

もいと物おそろしいらへもやらでさりや聞えさせしまたがせぬことゞもを聞きめ  
せ(同 藤袴)十。夕霧 御けしき源のけさやりかれと猶うさげひおそりおとゞも

さりやかく人のおしそるるあんよおつる事もあらましくばいと口をしくねちとさ  
らま(和泉式部物語)おりねと志のびての給へばさまあしきやうなればおりぬさ

りや人も見ぬ所ぞりし今よりもりやうよきこえさせん(源 かけるふ)十五 たびめし  
く心よこきとや見ゆらんとおぞすもそづりしさりや只此ことをのみおぞすなりけ

りいつよりかりけん我をいりよをりしと物わらひ給ふ心ちよ月頃おぞしとたり  
つらんと思ふよ(大鏡)七 關白左大臣大納言二人中納言の御親よておそしますさり

やきこしめしあつめよ日本國よ唯一無二よおそしまは

さりけり(宇治拾)十六 さふらひ通俊のもとへ行て兼久こそかうく申て出ぬ  
まどかさりければ治部卿うちうをづきてさりけりく物かいひそとぞいそれける



**補**ざりける(貫之集)「ふる雪ハいろハまりへバ打つけハ梅をみるさへさむくざりける(同)」古寫本「菊の花ひちてかがる、水よさへ浪のしをかきやとよざりける(同)」古寫本「もらへてももらふる水のつきせねわねられがさき戀よざりける(同)」古寫本「君よよりぬれてぞとたるから衣袖のかさこのつまよざりける(同)」古寫本「あまよのぬひりさね、よから衣おもふ心の千重よざりける(拾)」雜戀「いづれをりたるしとおもそん三輪の山ありとあるの杉よざりける(續後拾)」哀傷「明くれてちとせふるものとおもひしを猶世の中の夢よざりける(玉葉)」賀之「心ありてうゑるやどの花かれバ干とせうつらぬ色よざりける」

**さりけれバ**(大和物)三女ども車かり一人のおほりりをたれよある文よりとあんいひやりけるさりけれバ男のもとより一百敷の云々(伊勢物)廿三心うがりていりせかりよけりさりけれバかの女やまどのりよををやりて補(同)九十云々くせちいできよけりさりけれを此女のせうとよそりよむりへよ來りけれバ

**さりけかく**サアッケ(源夕きり)卅さりけかくてさぐり給へどか(新古)夏「庭のおもひまたかどくぬよ夕立のそらさりけかくをめる月りか(源空蟬)三さりけかきをぐたよて(同)胡蝶」廿さりけかくてあひ思ひ給へ(同)螢六螢を云光をつゝとり

くし給へりぬるをさりけかくとかく引つころふやうよて(拾玉)六「後の世よまよとど今ハ夕やそのそらさりけかくいづる月りけ補(同)五「とがやどの卯花がきの花ざりりそらさりけかきゆふ月夜りか(宇治拾)三むしを引おそひてさりけかくて(榮鶴の林)廿さりけもかくさりりよおそつるとの、思ひりけぬぞどの御ありさまこそりへそとあそれよりかーけれ

**補**ざりけたよかく(貫之集)「春よのを見えて山のへ冬かれバさりけたよかく霜枯よけり花にのみみえし山のを冬くれいさかりたにあく」  
**さりきこゆ**(源紅葉賀)卅うへの御もてかしのこよかきわづらひうていとことよさり聞え給へるを

**補**さぬる(万)六七「いかと野のあさぢおーかへさぬるよのけながくあれバ家ーしぬさゆ(新後)秋下天皇「此ころいあさのさころもうつさへよ月よぞさねぬ秋のさとびと(万代)雜四「かやがねよむしうらみける野べよきて獨さぬれば都おもゆ(同)季廣「ささりよやあまのとまやよさぬるよハ浦風さむく雁なきとたる(玉葉)旅常磐井入道「いさこゝあこよひいさねん旅衣山おろし吹て袖いさゆとも(同)前太政大臣「足引の山松がねを枕よてさぬるこよひの家よぬさる(新後拾)騷旅「い

院御製



づくより今夜のさねんいさみの、浅ぢが上も雪ふりより(新葉)戀一「なけきつ  
つひとりやさねんあへ行鳴の羽がひも霜さゆるよ(續後拾)戀二「よそあのみ  
人をみ山のさねりづらさねぬいけるりひやなりらん(新續古)羈旅「あづまの、  
をがやありしきさぬるよ月ふけゆけ都ぞおもふ(續古)羈旅「あべ島の山の  
いもがねかたしきてさぬることよひの月のさやけさ(万)十四「さぬらく玉のをを  
りりあふらくふたのたりねのさるさとのこと(同)十五「たつがさあへをさ  
してとび渡るあかたづくく獨さぬれば(同)同 卅二「思をせもまことありえんやさ  
ぬるよのいめよも妹が見えざらなくよ(同)同 卅五「さぬるよのおそくあれども物も  
まぢやすくぬるよのさねあきものを

さぬつ鳥(万)十六。竹取 狭野津鳥さきあけらひ 云々(古事記)上ノ。八千予 さぬ  
つ鳥さ、いといよむ

さぬきわらさ 讃岐圓座 (菅聞)十六 讃岐わらさ一まいをもちて

さる 妻ニ(宇治拾)四十 もとの妻をばさりつゝわろくかたちよき女におもひつきて  
それを妻にて(同)十三 内よよきおやうぞくきたる女のゐたるをみければこがさり  
よふるき妻なりけり(拾)戀くよもちが娘をともみつまりりさりて後鏡をりへ

つらむはとてかきつけてつらむける

さる 去(源)かあ)下ノ小侍従 人の参るよいとくるしくて木丁ひきかけてさりぬ

(同) 桐つば 源氏の君の御あたりさり給さぬを(同)わか菜)上 御位をさらせ給へれ

ど補(貫之集)一雨ふればいろさりやまき花さくらうをき心もわがおもまなくよ

さる 猿(土御門院御集)一月影を命をりへ猿よりもまづとてぬる我身なりけり

さる (源)帝木)四十 女もさるとせうそこありけるよ

さる (源)帝木)初 忍び給ひけるかくろへをさへりたりつたへけん人の物いひ  
さがなさよさるのいといたう世をまぐりりまめたち給ひけるよとなよびりよを  
りしき事いなくて片野の少將の笑それ給ひけんり

さる (此)サルハハ 扱モトイフ如ク(源)若菜)上)三 ともりへりぬ朱雀院の姫宮六  
條院まうつろひ給せん御いそぎを給ふ聞え給へる人々いと口をくおぞしかけ  
く内よも御心をへありて聞え給けるよどまかゝる御さだめを聞召ておぞしとまり

まけりさるのこしぞよそちまかり給ひければ御賀の事おほやけよも聞しめし  
ぐさ世中のいとなみよて(同)同 十五 ことなくひさかりつるよ身もひえまける  
おちさこめる心のおろりからぬよこをあれさるのつみもなりやとて御ぞひきや



りなどし給ふ(同 橋姫)廿のこりハ今をこしおもなれてこそうらま聞えさまべ

りめれさるハく世の人めいてもてな給へばおもてま物おぞしわりざりけり

とらめしうなんとて(同 東屋)十かまがしをとり所はおぞしける御心のちり侍ら

ざりたりさるハいとうれしく思ひ給へらる御ことよこそ侍るま(古)哀(二帖)

四(のち)一時しまれ秋やハ人よとかるべきさるハ夜さむよかれる比し此哥古今哀

ガ身マカリケルニトアリテ下句あるを見るたし戀しきものをトア拾戀五よみ「まどしらぬ思ひ

よもゆる我身をかさるハ涙の川の中(枕)十三心あしき人のやいなひたる子さ

るハそれがつまもあらねどかゝる人よしもとおぞゆるゆゑまあらん(同)十三ノ

驚ノ十とせをりりさふらひて聞しよまことよさらよおともせざりささるハ竹ち

りくこうむいもいとよくかよひぬべきたよりかりり

さるハ宣長云上ヲ受テサアルハトイフコト源あらし廿いとまかしこまハるかり

びて侍るたもとよつゝとあまりぬるま更し見給ひも及び侍らぬかしこまよあん

さるハ「あがむらんおぞ雲をなぐむるハ思ひもおぞ思ひかるらん(同)十四こ

こまハかしこまりてとづからもをさくまらぬ物へたゝりたる下の屋よさふら

ふさるハあけくれ見奉らまはしうありぬ思ひ聞えて(同 紅葉賀)十見せ奉り給えぬ

もことさりかりさるハいとあさましうめづらくなるまぞうつゝとり給へるさまた

がふべくもあらぬ(同 朝のほ)六なまめりしきけさへをひ給ひしけりさるハいと

たう過し給へと御位のほどよハあまざめり

さるハ(伊勢物)八十さるハまををりよとこの事とて御文あり(塗本)さるほどに(同)

七十みこ悦ひ給うてよるのおまのまうけさせ給ふさるハかの大将出てたをりり

給ふやう云々

さるよてハ宣長云ソレニシ源みよつくしハかべてあらぬをくせにてひぐくし

き親も及びなき心をつりふまやありけんさるよてハかしこき筋にもあるべきひと

のあやしき世界よ生れたらんハいとをしうかたどけかくもあるべきり(同 若紫)

六此君やよづいたるをよおそするぞ覺えらんさるよてハかの若草をいりて聞

給へる事ぞと

さるよてハ(源 冬)廿ゆりむつびねちけがましきさまよておとも聞おぞ

所侍りかんさるよてもかゝる事なんとおらせ給ひて

さるほどハ(源 蓬生)九云々さる程よけし世中よゆるされ給ひて都よりへり給ふと

あめのしこの悦びよてさちさわく(補 著聞)廿七さるほどよあり障子のやぶれよ



り(宇治拾)四 いづりたともちらむたゞふりれて行まけりさる事と父母の人々も

やどひあつめて舟よのらんとて来て見るよ中よもさるるもさるるもさるるもさるるも

さるべき(源桐つは)七かくてもおのづから若宮などおひ出給ひさるべきついでも

ありなん命あがくところ思ひねんせめかどの給え(同)七けふむとむべきいのり

どもさるべき人々うけ給される云々(同)四さるべき御あそびのをりく云々まづ

まうのやらせ給ふ(同)九さるべき契こそいおとすまけめ(同)三廿さくさむやとさ

るべき人々をまゐらせ給へどおせらひはおせさるゝたよいとりたき世々かど云々

(同夕顔)七もし聞えありてびんかりるべき事かりどもさるべきよこそ(同)同(源木)

卅さるべりらん雑事らうら給えらん(同)六かりのせれどももどよりさるべき筋

からぬ

さるをさせ(松羅)和名廿松羅一名女羅(和名萬豆乃古介)貫之集「こけながくお

ふるいもほのひさしさを君よくらべん心やあるらん

さるかた(狭)四ノ上九さる方よりしるめやそくこゝろやそきりたよのたどでり

いどこその思ひ侍れ(源)卅水の心をへあどさる方よをりしうそなしたり

さるりたよて(うつは)樓の上下四かゝることなることを好むあひさ文の道を

ばさる方よて此方の師よせん女宮たちよもをへ奉らんとたびくいせせよも

きりで(源)源木八をぐれてきせかきりこのえらびよこそ及をさらめさる方よてそ

てがさきものをバとして式部を見やれば(同)總角四十うちあそぬそりのさまおれ

どさるかさよをりくおあして(同)あさかほ初故大殿の宮のあらまそくふりが

さき御有様あるをもておなれこえふつゝりよこちでちくおせ給へるもさるり

たかり

さるがう(散樂)二代實録七ノ新伎散樂競盡其能(空穂)嵯峨の院百皆人々物の音つ

かうまつり合せておんの舞哥うさひさるがうせぬか(同)藏開上ノ一さるがうそ

る人よてかめまひを上下ひとたびよとわらふ(同)上八あそれ宰相の朝臣世

よまどらまそりりべいりあるさるがうをしてひとひからま(枕)七右の人をこ

よおもひて打わらひてやゝさらよおらせと口引たれてさるがうよかくるよ

さるがう言(源をとめ)九かきまうのゝり顔を顔ども夜よいりてのかりく

今少しけちえんかるほりけよさるがうがましくとびけよ人ごろなるなどさま

さまよ(蜻蛉日記)中。女君ヲムカヘテコモリ佛よこと由申給へ例の作法なると

て天下のさるがうことをいひのゝらるめれと夢よ物もいとそ(枕)五九日







さるまどき 通レヌナリ (蜻蛉日記) 中 左衛門かこの御屏風の事せらるとてえさるまどき  
たよりをそりらひてせめらるゝことあり

さるまどき 然ルベカラヌ也 (源 帚木) 初さるまどき御ふるまひも打まどりける (同 まつ風)  
八かたふよつりてえさるまどきよをいひつゝ

さるこ (今昔) 猿籠は長き繩をつけておろそべしをれよのりてあがるべきなり  
とよさへる

さるこ 源 帚木 廿きとせこトかたふとてさることゝおろすべからめり  
さるもの (源 旗柱) 四まことやうの云々内侍のかこのぞと君も 近江ノ君 さるもの

のくせかれバ色めりうさまよふ心さへをひて  
さるもの 源 柳 四十春秋のみときやうをさる物よてりんとさまもさまとよふ

とき事どもをせさせ給ひかとして (同 旗柱) 十御心をさる物よて人いりよとりか  
いそべりけん (同 桐つは) 廿まこと御がくもんはさる物よてこと笛の音よも雲を

ひやく (源 繪合) 廿一文才をばさる物よていそせ (榮見はてぬ夢) 廿女院よの關白殿  
の御心ちおそろしうおぞろさるものよて世中心のとりよもおぞろおきて

せやとささまおぞろみされさせ給ふ (源 夕かほ) 卅おかつ事をさる物よて人よ  
九

いひさわがれ侍らんがいとときこと (大和物) 百四十かく男をかりと聞て此男おも  
ひたりけれと心よもいれでたゞさる物よておきたりけり (源 帚木) 廿こよあきとた

えおろさる物よあなしてかぐく見るやうも侍りあま (枕) 六殿をばさるもの  
よてうへの御すくせこそめせさけれ

さを 小青 (源 里かゝ) 下七あをとおどろへ給ひつるよ へるし色 色はさをよ白くう  
也 湖月本

つくしけよ (同 末摘) 五色の雪をづりく白うてさをよ (万) 十六人ごまのさをあ  
る君がたゞひとりあへり雨夜のひさしとぞ思ふ

さを 竿 (夫) 十八「この山たておくさをのりひぞなき日をふる雪よいるよとえね  
家佐

バ (同) 同「そつ雪のふるよのさをいたてしりどをことも見えぬこのあら山  
〇 補 さをうちからん (夫) 八 頼綱 「舟をたよさを打ならしかゞり火のいりあるふち  
をゆきかへるらん

さをと (竹取) さをよの尻さらぎのどをりてろよ (万) 四 前年之先年  
前也 二 月 十日

さをとる (夫) 五 六百番哥「とかりする人やきくらんをさのよさをとる尻ぐは聲  
合 雉 季 經 卿  
あさるかり (万) 十九 「すれの野よさをとるきよいちどろくねにしもかかんこも



りづまのも さの發語たゞ

**補** さをとめ (夫)七 國成

「さわとめの山田代よおりたちていそぐ早苗やむろの早

わせ(顯季卿集)「たねまき一早苗の稻や生ぬらん一づこゝろかくとめるさをとめ

(山家) 下「いそかつむあまのさをとめ心せよ沖ふく風よなみたかくある

さをかぐるま(吳竹集)古「かよこども思ひすてたる身ぞやいささをなぐるまのゆ

め此世なれを 織機の具よ梭といふ物ありそれを投。廣足云此説誤ありかしの

**補** さをもおよむ (續古) 雜下 忠岑 「ふりけれどちひろの海のやどりぬ人のおもひ

いさをもおよむ いさをもおよむ

さごがい(源竹川)三 かざらりよの給ひて心もさわがい給をせ(同行幸)十あや一さ

まで思ひあつりひ心をさごがい給ふをみ侍るよ

さごがれ(源總角)四十 おかト御さごがれよこそいおをせかれ(同)五十あを一のさ

わがれいいとほしくとも(同) 浮舟)廿さごがれ奉らんもくるしけれと(同)紅葉賀)六

おほいどのよいさわがれ給ふ(大和物)百七十 いと久しうありて此さわがれ一女の

せうとゞもあどかん人のさざしよ山よのぞりたりける

**補** さごがさる (源あかし) 二波風よさわがされてあんと人のいひつたへんこと

さわがい(源野分)五 ささりりの御心どもをさわがいて(同) 三雲いりづち

をさわがいたるため

さわがい(源行幸)卅 いで此返事いさごがいとも我せんとの給ひて(物ノトリコ

さわたる(夫)十三 般富 門院大輔 「つくづくとをがむる月よ浮雲のさわさるるよとよ夜のかり

よけり(万)廿五 梅のをなささちる岡よほとゝぎををれてさごさる君いさゝつや

**補** (万)十一 くも間よりさごさる月のおるしくあひ見一子らたみんよしもがも

(同)四十 高山よさりへさごさり高々よごがまつ君をまちてあむりも

さわぐ ぎ(長能集)「谷風よまやまの花やのこりあるとうちぞごたれるとづもさわ

ぐよ(源東や)五 ろくをとらる事うづむさりりよてもてさごぐ(土佐日記)汐とち

ぬ風もふれぬべいとさごけバ(万)廿二 そをとるとさごぐとたみも家わをれ身もさ

かいらぎ(源帚木)四 心ぬさわぎてしたひきたれどとうもなくておくなるおまよ

入給ひぬ(同) 夕かほ)四十あめのこの人のさごさかり(同) 澤標)四ごが心のこりく

いそけあきよまりせてさるさごぎをさへひきいで(伊勢物)六 あをやといひけれ

とかみあるさごぎよえきりざりけり(源野分)十 かせのさごさりりとふらひ給

ひて



増補新編 源氏物語 卷之四十一

ささやり ノコリナク (源 總角) 四 ともかくもおぼしにくらんさまをささやりに  
承りよーがかと云々 (同 紅葉賀) 十 ところづゝささやい給ひけり (空徳 藏開) 中ノ其  
めりいたらん一所こそいささやりからんあまのよりいとしづりうの云々 (蜻  
蛉日記) 中いミトけよかめ給ふときくよいミトウかおしく我こちのささやり  
よもからねづくづくどふして (源 寄生) 十 けぢりくつりひからし給ふ人々の中よ  
ハおのづからよくから忠おぼさぬよもありぬべけれどかどよと心とまるもあさ  
こそささやりかれ (狭) 三 中今更よかゝる物の常よ見ゆるを人もあらばいりよと  
いミトウおぼしめさるれどささやりよ物もえの給せねバ (日本紀私記) 佐和也加  
爾也言蘿菔之根嚙時左和也加奈利 (遊仙窟) 聲音不徹 (源 夕かほ) 十 あさやりよ引ゆ  
ひたるこいつきささやりよかまめささり (拾玉) 三 「思ふことかきそとゝせん人も  
がかいとささやりよいひあらもさん (補) (源 あり木) 七 御心ちのささやりよ成給ひ  
よたりや (宇治拾) 七 二 そのときさめて御こちいとしささやりよのこりなくあり給  
ひぬ

さわやぐ ぎ (源 夕霧) 廿 物づゝみをいさうし給ふ本性よきまどくしうの給ひささ  
やぐべきよもあらねバ (騒) コトノヤウ (同 わるあ) 下 七 五月かどいましてそれくし  
らぬ

からぬそらのけしきよえささやぎ給そねどありよりのよろしきさまかり (同 み  
をつく) 初時々おこりかやませ給ひ御めもさわやぎ給ひぬれど (同 夕きり) 十 物  
のけよわづらひ給ふ人のおもしとみきとさわぎ給ひまもありてなん物覚え給ふ  
ひるつうた日中の御かちもて (補) (榮 月の宴) 廿 おおんこちさわやがせ給などを  
れバ

さわく (古事記) 下 うちおほね佐和々爾

さわく (源 わけまき) 四十 ちらざりしさまをゆきくといえあきらめ給  
そで

さり (釋迦) 拾 雑上よみ 「いよへの虎のたぐひよ身をあげばさかどさくりいとそ  
んとぞ思ふ

さぐ (アリ) 八 (大和物) 段 「大澤の池のみづくきたえぬとも何ううらとんさぐのつら  
さハ (後) 戀 二 鶯の雲井よこびてかく聲を春のさぐとぞこれいよつる (六帖) 六 下

「夏のよの子もち鳥のさぐぞか夜ふりくかれて君をやりつる (後) 春中よみ 「も  
えとたるなけきハ春のさぐかれバ大方よこそあそれともみれ (同) 戀 一 よみ 「立り  
へりぬれていひぬるしはかれバいくたのうらのさぐとこそこれ (新古) 哀傷後徳大  
寺左大臣

増補新編 源氏物語 卷之四十一 三十一







りけり(空穗 祭の使)五をりしき舟もおろしうき橋をたしあつき日ざりりよの人

々をぐまをどし給ふ(枕)四ささかりふる雨のさりりよやりたるよいとくかへり

来り云々(後拾)頼家「一はたへの枕のちりやつもるらん月のさりりいこそねら

れね(拾)戀法師「忍ぶれはくるしかりけりまのそしき秋のさりりよかりやしあま

し(源 蜻蛉)五十秋のさりり紅葉の頃を見ざらんこそあど若き人々の口をしがりて

々(蜻蛉日記)中申のことでさりりよかりよたりひぐらしさりりとあきもちたり(新

千)秋下「もつしものおりぬたまこき紅葉のいろのさりりを誰し見せまし(大和物)

百五平仲が色このとけるさりりよ市よいきけり(源 夏の菜)下ノきんのなをさりり

方なれどもおらひ給ふさりりかればたどくしからせ(うつろ 嵯峨院)百御門よき

そとよて御あそびざりりまで大將源中納言あどまさうのこと給ひて

さがり(堀次)くも「さがり糸ををるぞうれしきさし、がよのくる人告る物と思へば

さがり(源 少女)十御ぐいのさがりをかんざしなど(同 空蟬)四いとふさやりまで

あがくいあらねどさがりをかたのほどいとよきよ(同 夕のや)十うちとけたらぬ

もてかし髪のがりめめましくもと給ふ(枕)八うらやましき物、髪長くうる

そしうさがりをあどめでさし人補(濱松物)四かいらつみやうたいかまのかれる

うみのつやさがりをよしらぎをかしけよて(うつろ 樓の上)十御ぐいのよろろ

き給へりさがりさいときよらかり(狹)三かまのそしいろよてこちどういあらせ

あむらりあるさがりをかどあてやりよあまめりしきさまよて

さりり(催馬樂)總角云々さりりてねたれどもまろびあひけり云々(後)春中「さ

ためし思えぬ山の音よのみ花さりり行春をうらまゐん(古事記)上ノ所成神名奥疎神

訓奥云「源 伎訓補(万)十五長歌 大和をもとほくさりりていむがねのあらさしまねし

さりり(源 わけまき)十御供の人々よもゆゑくしきさりななどして出させ給へ

り(同 はし姫)十所よつけさる着なごしてさるりよよもてまやし給ふ(江次第)置着

物(枕)六殿の御まへし宮づりさめしてきたものさりかめさる人々ゑいせあどおほ

せらる(源 行幸)廿とさりかまらせ給ふかまらねとりて出したりけるよ(伊勢物)

六十さりかへりける橘をとりて(大和物)百七十九たい塩着ししてさけをのませて

段(梁塵)下(二)催馬樂 我家とさりかまよいあよんあそびさたをりかせよけん

○さがかもの(うつろ 國讓)中ノ大將北ノ方さてい此さがかものあそ今いどら

うさけれ心を人し見ゆべくもあらせ(源 夕きり)六十いとあましう侍るさかな

ものをとて(同 帝木)廿此さかなものを打とけたる方よて時々かくろへ見侍りしほ



ど

さがかき(うつほ 俊蔭)卅。侍女娘ノ孕ムイテいさや近きまよよもぎ葎のと  
 こそのりさらへ女あかさかおさそふれよもの給ふべき事よあらむ(同 藏開)下ノ平  
 中納言ひとりのみよのあらトまたも聞やうあり兵部卿宮さかなき物いひりなとて  
 打らひ給ひて(伊勢物)十五さるさかなきえび心をみていりむいせん(人  
 丸集)十八「君がみまさかなく常よをかれつゝ花ぞのをふまいたくめり(源手  
 習)六かちひさいれていよくかくいであかさかのこたまの鬼や(同 榎柱)四十近  
 江君 いとさがかけよらみて(うつほ 藏開)上「かむのおとあかさかあらはあ  
 るよどのたまへ(同)下五世のなかよゆゝくさかなきことをいつゝおのがさ  
 まのあやしきをばあらで泣うらと奉れども(同 あて宮)廿うれへ申文を見給ふよ  
 ふ限なくさがかきことをつゞれり(源 帚木)八いりでこるをかりのさざしておど  
 て此方もすこしよろしくもかりさがかさもやめんとおもひて(同 橋姫)卅おちト物  
 ともおもひ給へられざりけり御琴のひびきがらよとこそ思給へーがとて心とけ  
 てもかきたてたまをせいであかさかをやう御耳とまる計の手をどいづくより  
 りあゝまでいつゝむりこん(同 桐つほ)廿春宮の女御のいとさがかくて(同 帚木)廿

いとひよやでもりよかさけかりりくバあへかさこゝちしてさがかくゆるゝかり  
 りし我をうととねとおもふりこの心やありけん(同 さのき)十帝のいととくう  
 おそしまはおちおとゞいとさうよさがかうおそしてその御まゝまかりなん世を  
 いかならんと上達部殿上人みな思なげく(同 榎柱)四十 あかうたてやこのおぞとひ  
 きいるれいとさがかたよらみてとりぬたれ(神代紀)上(神功紀)六ともよ不  
 祥の字をさかなと訓せさり(三代實錄)四十九 中臣志斐連廣守奏言近窺天變奉爲  
 天皇見不祥之氣(神功紀)六人自降服殺之不祥(大和物)百五十 このをさの心  
 さがなくあしきことをいひきりせけれ

○物いひさがかき(源 帚木)初物いひさかなさよ○宣長云物語よての只口さかなき  
 よて俗言よ口やうまよといふ事也

さのう 麝香(落窪)一くをつきよたりいとくさくていきたらをかりくうとまれあ  
 んとの給へばさちまきわらふくかゝる雨よかくておそしまゝさらば御心ざりを  
 おやさん人のさうのりともかぎかゝたてまつり給ひてん

さりのする(万)廿四「堀江よりをさりのする梶のおとのまかくぞからを戀り  
 りける(遊仙窟)三 浜軽舟注逆而上日浜(神祇式)八 朝日 能 豊逆登 爾



さりやき(沙石集)六上かくく申されければ此賊も袖をいざりてさりぬさて次日の夕方さりやきある入道此房よ来てひそり申けるのよべの強盗入道よかりて参りて候

さりまく(万)ノ八「此川のみかこさりま泥ゆく水のこと返さと思ひそめい(山家)上「かみた川さりまくみをの底ふりみかぎりあへぬ我心りか(新拾)雜中「大井川みかこさりまくいそぶちよたゝむ筏のすぎがたのよや俊頼

さりまくら(江次第)七ノ神今食事云々参議與辨昇坂枕奉之退○神ニ奉ル枕也(掃部式)廿六月神今白布端坂枕一枚長三尺廣四尺貞觀儀式三踐祚大嘗祭儀中掃部寮以白端御疊加席上以坂枕施疊上

補さりふ(著聞)十ノ相撲今一度さりふてとてあゆみよる廿六ノ所補さりふ(玉葉)旅夫(夫)廿大僧「めよかけていくりよかりぬ東路やとくよをさりふふ下のいさ山正隆辨

さりえ(古)序きのふいさりえおどりて時をういひ世よこび(源)見のき上七此世のさりえをおもふよも侍らぞ(同)玉萬廿三條らもせむぶんよさりえて(同)柳四十五世よさりえ時よあひ給ひ一時(補)源初音三われことお死せんとうちこらひ給へ

る御ありさまをどしのとどめのさりえよ見奉る

補さりて(宇治拾)二ノ刀をさりてよぬれもちて廿四

さりさま(古)雜上よみ「さりさまよ年もゆりなんとりもあへせ過るよとひやとよまりへると(源)柏木一四十一木のいさの雫よぬれてさりさまよ霞のころも死さるは

るりか(年中行事哥合)「つものりける君がよとひのさりさまよ年月つらん鳩のつゑかり(源)わか菜下五「さりさまよ打すて給とんとやおせ(齋宮女御集)三「さりさまよいふとも何りつららんかへはとよも身をぞうらむる(源)すま五あめのいさ

をさりさまよあして(補)拾玉一「みでもりよつのくむあしをむ駒かかけさりさまよかれる此世り

さりさまと(蜻蛉日記)上下「もていそんことのかさよやあらんさりさまとぞぞある

さりき(古)とりも「神垣のむろのやまの榊葉の神のまへよ志けりあひよけりのい哥

さりゆ(續後紀)十五尾張於岐那度天和飛夜波遠良無久左母支毛散可由留登岐爾伊天豆萬毗天牟(仁德紀)十菟藝泥赴椰莽之呂餓波鳥箇波能朋利澆餓能朋例婆箇波區莽珥多知瑳箇踰屢毛々多羅儒椰素麼能紀破(伊勢物)百一藤氏のことよさりゆる



をおもひてよめるとなんいひける(續紀)上卅一然為波國曾昌由流吾家長昌由流也(方)廿五、長哥

ものごとく佐可由流ときと(古)上卅一今こそあれ我も昔の男やまさりゆく時もありよ一物を(蜻蛉日記)上「神垣をのぞりくたりわおれどもまたさりゆりぬ心こそをれ(忠見集)「君が代まさりゆくべしと思ひせはとまよものをた

たえねの道(源花の宴)十萬のことよりの柳花苑まことまこうたいの例ともありぬべく見給へしにましてさりゆく春ま立出させ給へらましりバ世のめいやくよや侍

らましと聞え給ふ(續拾)雜中、三條入道左大臣「くらゐ山さりゆきこえて後まこそやまくの道まおもひ入り(同)後嵯峨院神祇「男山老てさりゆく契あらバつくべき杖も神ぞ

きるらん(玉葉)賀よみ人しりす「あふとある朝日の里のふよりを世のさりふべき光見えける(同)神祇神賢「春日山かみのめぐむの昔まもこえてさりふる北の藤なと(續後

拾)賀俊光「君が代の千年五百年かさねてもいやさりふべき益原の里(新拾)神祇成久「あひまあひてまもる日吉のりぎく一七の道の國さりふら(新後拾)慶賀左大臣「をさ

まれる御代のあるも更ま見ええてさりふる志死まの道(夫)十八「春日山をのうぢ人のまどゐてうたふさり木のさぞさりふらん廣足云さかふ

さりサカハ助詞也うつは菊の宴上。女御ノ春宮よりの猶聞え給ふや答さりさ

れどやんてどきき人おそく候給ふとて(源 横笛)九めやまかるべき事あらんとおん思ふとの給へばさり一人の上の御教をり心づよまてりゝるを死いでやと見

奉り給ふ(同 夕顔)七よろづのもの侍るかと申をさりさま思ひかせと(同 空蟬)六かういの几帳をへて侍りときこゆさりされどもとをりくおせと(同 帚木)卅三さりい例もい給ふりたかり(同 浮舟)十一いりぞり侍らんとまういさり

一昔も一とび二たびかよひ道かり(同 常夏)十四内府わらひ給ひてさりいりこまこそ年をろおとよも聞えぬ山がつの子むくへとりて

さいがい嶮(万)卅九「あられふりきいまがいけをい険とくさとりかねて妹が手をとる(仁徳紀)上「まいたての佐餓始枳山もわぎもことふたりこめればやまむいろり

も(古事記)下「はいたてのくらまいやまい佐賀斯那杼いもとのぞれば佐賀斯玖母阿良受(夫)卅六信實「道のべれあいさいいねいぬいさいむいけてさりいき山をこえぞいづら

ふ(源 夕顔)十かどてこのかづらいきの神こそさいがいくいおいきいれとむいづりて(山家)上「まいついひいをいらいでいついトいをい手いまいぞいといるいさいがいき山のといり所いは(遊仙窟)險

峻非常(宇治拾)廿七ふもとより岑へのぞるぞさいがいきはいけいき路といりりけるを(源 うき舟)廿六此五位一人かん御馬の口あいさいふいらいひけるさいがいき山こえとて



ぞおのく馬よはのる(神樂)杖「あゝ曳の山をさげみゆふつくる柳の枝を杖よきりつる

さくろ 賢。契沖云俗ニカシヨ(榮衣の珠)九またむつろうてうせ給へれば御ゆどの

のちどしてやがてちで君もおおト物よいれたてまつりかきをへて御ふどころよいたきたるやうよてふ奉るやどおろりたれもさくろうみ奉るべきよあらざ(源

浮舟)六十のいよあるものども此さくろがりどちたるころよていとわりなきあり

(同)七十御湯づけかど万よいふをさくろがるめれと云々(同夕のほ)卅これひとり

さかき人よておせよるりさぞあきや(發心集)八ノ。鯉ナ放チさくろき事をあ

給ひて(源帶木)廿此さくろ人よさかろト一き物ゑんトせべきよもちいぞ(同若

菜)下ノ心とそむきよ一がかとさゆみかくおせわたれどさくろきやうよやおせさ

んとつゝまれて(同浮舟)十かゝる御ありさまを御らんとおらぬよあささくろらが

る人もあれど(蜻蛉日記)上おのがさくろがらん時こそいりでもく物一給せめど

おもへばかくておを是こそ見奉るべき限りおれかどふかがらいぞうか

たらひてかく(源桐つは)九今のかき人とひたふるよ思ひかりかんとさくろの給

ひつれど(同空蟬)十夜中よこのかぞありせ給ふとさくろがりてとさまへく(同

あけまき)五けさやりよおとあびてもいかぞりのさくろがり給えんと(同句宮)十さ

あたりにて心よあむべき事のおきやどさくろよさつよやありけん(同總角)卅いとゞ

我心よりよひておせぬればさくろたちにくもおせえぞ(同みをつくし)五病よよ

りて位も返奉りてをいよ老のつもりをひてさくろき事侍らトどうけひき

申給えぞ(神武紀)一生而明達(仁徳紀)叡智(古)序心々を見給ひてさくろおろり

かりとあろ一め一けん(源桐霊)九さくろの給ひつれと車よりおちぬべうまぞひ

給へば(土佐日記)こと人々のもありけれどさくろきもかりるべし注ヨキ哥モナカ

リシト也(源紅梅)十阿難が光をちけんを二度出給へるりと疑ふさくろきひどり

のありけるを(同總角)四十我さくろ人よて聞えんもいとつゝましければ(同帶木)

廿此さくろ人よさ(うつは)あて宮七。アテ宮参リテ侍従病オモル皆人物もおせえさくろき人

もか(同)九「今のとてふりづるとさ紅の涙とまらぬものよぞありけるとぞよ

さくろうもいそであきまどふ事かぎりか(源あらし)四神のかりひらめくさま更

まいそんりたかくて落かゝりぬとおせゆるよある限りさくろき人か(宇治拾)十

御帳をかりを給せりて罷り出べきやうも候を返參らせさふらひかんと申て

犬ふせぎの内よさくろ入て置ぬまたまぞろと入る夢よかどさくろくあるぞとゞ



たさむ物をさ給はらでかくりへい參らするあやしき事かりとて(狹)二下さきり

さやうよやとぞづりく覺さるれどくられまぎらとて(源 薄雲)一廿むりりのさ

りしき世よもとありけるを(紫日記)ふやのさりせさきりたちさいらさるたり

(枕)十七さきりしき物(源 かな)十八たふれよてもかやうよへたてがましきこと

かさりいぐりきこえさせ給を(宇治拾)十七御前へまらせ給ふりさきりく申やう

かれどかよりまらせ給ふ(著聞)連もる山のいちこさきりくかりよけり

さきり(源 みゆき)廿中將の君ぞつらくいおはるるさきりいらむりへ給てかろめ

あざけり給ふ(万)卅二「たゞよるてさきりいらるる酒のみて酔あきるよをちり

りせけり(源 紫)十かりくのさきりい心なく打たらひて心のまよをいへ

おほしたてゝとをやとおやす(六帖)「秋の野よゆきてみるべき花のいろをたがさ

りいらよ折てきつらん(源 紅梅)十五母君ぞたまさきりいらがり聞え給ふ(同 手

習)四十もづかしくともあひて尼よか給ひてよといそんさきりい人すくかくてよ

き折よこそとおもへば(同 關屋)七あいかれさきりい人やかとぞ侍める(うつは 俊蔭)

五十五 さきりい人ありて見て人のうかゞひなどするに尋出られて親の御おもてぶ

せ我身もいとゞいとくからん事となけき侍りいかば(万)三十八「家思ふとさきりい

らなせを風まもりよくしていませあしきその道(同)六十二「大君のつりのさなくに

さきりいらのゆきいあらをら沖よ袖ふる(重之集)四惠京人の家の櫻を見て「さか

らとおもさざらなんさくら花ちらばとかりの人をもしまん(古)八「さきりい

らよ夏のたまねさゝの葉れさやぐ霜夜をこがひどりぬる(伊勢物)四十昔をかき男

けしういあらぬ女をおもひけりさきりいらるる親ありておもひもぞつくとして此女を

外へおひやらんとぞ(源 胡蝶)廿一いとさきりいらるる御親心がりり(枕)廿三「さき

いらよ柳の眉れひろでりて春のおもてをふるる宿りな(万)卅三「あなまよくさき

いらをま酒のまぬ人をよく見れば猿よかも似ん(源 わけまき)五十さきりい人の

そひ給へるぞもづりくもありぬべく(中ノ君心ニカ)同はたる(四 親よいあらでむづ

ろしき御さきりい人の(赤染衛門集)さきりいらかりといひされば又の日「さきりい

のうれいかりいをおおつくいよ死さし出のありときりさや(宇治拾)二十さきりい

るひといかくぞるるやまきことをひとへまつとおもくいひなしてかなしきめをみ

せしりバそのたうよあぶりころさんるるぞ(源 東屋)五十ふりまへさきりいらめれ

て心いらひのやうよおもそれ侍らんも(著聞)十六ある人と雙六をうちぬるを云々

越前房といふ僧來りて見所をとてさまゝのさきりいをいけるを云々 此僧さきりい



らまさして立ぬ(源 蜻蛉)五十お布かたの野べのさりいらをこそ聞えさばまといふ  
(齋宮女御集)一梢ゆゑとかりの花を、いむまよさきりらかりと風やおもそん(源 玉葛)四十  
りやうよこりあうふるめりうかたそらいたき所のつき給へるぞさきり  
らよもてわづらひぬべくおせ

さりいまごと(神武紀)十八テソヘウタサカシマコトハラヒサリキマガチ以諷歌倒語掃蕩妖氣

さりひ(古)戀一「おもひ、やるさりひをるりよなりやせるまよふ夢路よあふ人のな  
き(源 すま)八 四十一つり都のさりひをまたみんとかん(同 あり)五家まをかれさり

ひをさりて(貫之集)「ふる雪をそらよぬさとてたむけたる春のさりひは年のこの  
まば(重之集)「いそぐらん夏のさりひは關をゑて暮ゆく春をどめていぐか(元

眞集)「こよひより萩の葉風のおどはあり秋のさりひは入やたつらん(源 若菜)上七  
いまかん此世のさりひをこゝろやすくゆきまをるべき補さあふと活したる(玉)二

下「たのむべき夢路いたえておもひやるさりひをるりは秋かせぞふく(新古)雜中  
「山がつのかゝ岡りけていむる野のさりひはさてる玉のをやなぎ(風雅)春上

「松浦がさもろこゝかたてみこさせさきひの八重のかはまなりけり後鳥羽院

「さりもぎ(夫)廿「山ふりく八重のさりもぎひくとてもよのうき事の猶ぞかよそん

「百鍊鈔」十 山門閑樞道引逆母木云々○信友云逆茂木ノ意也茂木ハシゲレル木ニテ

ソラ逆ニ突立テ垣ニユヒテ防トスルナルベシ茂キノコハ別ニ云リ補長秋詠藻」上

「世中のせき戸よふせるさりも木のもがれそてぬる身よこそありけれ

「さぐれ(空穂 祭の使)廿飯いひ酒をさぐれむ(源 やどり木)三 いよへよりつたせり

とりけるたから物ども此折よこそいとさぐれ出つ(榮 うち)廿うたがへいさ

どころをもさぐさせ給ふ(枕)十五 さぐれ出たる(紫日記)ふるき反古ひきささぐれ

「補(著聞)十六 其あとをさぐれけれ(枕)十八 万の物をかへはと見たるよささぐれ

出たるいとうれい

「さよ(小夜)古(古)秋上よみ「萩が花ちるらん小野の露霜よぬれてをゆりむ小夜のふく

とも

「さよかり(古)秋上よみ「さよ中と夜のふけぬら雁がねのきこゆる空は月こさる

そゆ補金葉雜上「さよ中よおもへばかあそちのくれあさりのぬまよ旅ねして

れり(同)戀下よみ「ぬす人といふもことこりさよ中よ君がこゝろをどりよきたれ

バ(和泉式部續集)「さよなりよいそぎも行き秋のよをあり明月のなをさかりけり

「補(さよまくら)新古(羈旅式子)「まつがねのをとまが磯のさよまくらいさくなぬれ

内親王

「さよまくら(新古)羈旅式子「まつがねのをとまが磯のさよまくらいさくなぬれ

内親王

「さよまくら(新古)羈旅式子「まつがねのをとまが磯のさよまくらいさくなぬれ

内親王

「さよまくら(新古)羈旅式子「まつがねのをとまが磯のさよまくらいさくなぬれ

内親王

「さよまくら(新古)羈旅式子「まつがねのをとまが磯のさよまくらいさくなぬれ

内親王



そあまの袖りの

さよふけがたサヨハ具夜ト云堀次常陸「此里は神樂やをらん笛の音れさよふけ

方よかり聞ゆかり好忠集六月初（新古）戀「かやり火の小夜ふけがたの志さこがれ

くるしやこが身人しをせのこ

さよころも新古釋教不邪婦戒寂然「さらぬたよおもきぐうへのさよ衣こがつまからぬつ

まかかさねそ

さよと延喜式十四内匠寮貫布九尺此外數江次第五四六丈細美布廿三段著聞

五ノくづの水干よさよとの袴きたる郎等二人を供させたりけり

さよすがら後戀一桂の「から衣きてりへりよさよをがら哀とおもふをうらむら

んもた續後紀十長哥、烏玉乃狹夜通小侍從集「さよをがら君とこがをるむ

つごとよ埋火をさへおこしつるりか

さた沙汰雜鳥羽院の御事の後ふるき文書どもの中よかの院此仰を承りてさ

たしける事どもををるしおきたるを見るよ惟方宇治拾一何をりどるべきとお

のくいひさたをるよよこ坐の鬼のいふやう兼輔集八詞書平のあり死がそりまよ

りのやりさたをる事ありてかん今までこぬといへる返ごとよ哥云々宇治拾十一

尤と申てさまとよさたし設たり同さたしやれといへをひくやある聲よてむと

いらへてたちぬ同五かやうの御あそびよ必參れといふ翁申やうさよよ及び候そ

ぞ參り候べし同十九此小藤太の殿のさたををければ三とやり四とやりよるひろ

けてぞありける右京大夫集七十ものささかどひまかくて万十一人まも

りありがきこしよこきも子があひ見しからし事ぞさよ多き千載大隅の任そて

てのやらんとしけるを大貳さよをる事まどしとてとめれば宇治拾十九この

こくくたりて國のさよともあるよ同七爲家よさよをべき事どものさよらひし

をさよしさしてまゐりて候しかり云々あとをさよしさしてかよせんよのやりける

ぞ同九ノくひものまてさよしおきたり

さたよ然源若菜上ノあまりうう打とけ給ふ御ゆるしもいりかれバどうしろめ

たくこそあれまおといさよあおぞしゆるしてわれも人も心えてかたららにめてか

し過し給そいよく哀よかん

さざりうつは國讓中三人々あまた物し給へらん源宰相よさざりよ奉れとて給へ

む云々これさざりよ參らせよとかん仰られつるととらすれば古詞初瀬よ詣づ

ることよやどりける人の家よひさしく宿らでほどへて後よいたれりければの家の



のあるトかくきたりよなんやどりのあるといひ出して侍りねれば云(同)戀一よみ  
 「かゝた川枕ありるゝうさねよの夢もきたりよ見えぞありなる(源末摘)廿さ  
 りよ見給ひてのありくゝあそれよいとくくまめやりなるさまよ常よおとづれ給  
 ふ(同橋姫)卅佛よもこのことをきたりよあらせ給へどねんトつるゝよや(夫)  
廿五「あろゝへのかりらの瀆の志もの上よあときたりあるとさのかち人補(續後  
爲家戀四「さどりよも見ざり一人の面影をなよゆゑ月よおもひいづらん  
拾眞宗  
さたまる(源桐つは)九「あくるとの坊きたまり給よもいとひきこさまるゝお  
 せど(同夕おは)十「いづれの道よきたまりておもむくらんとおもるゝやりつゝ(同  
末つむ)初「あをりなくくづはれてなをくゝしき方よきたまりかとするもあれば(同  
繪合)七「此判つらうまつり給ふいとどうけよりきつくゝたるゑとも有さらよえきた  
 めやり給をせ(同玉のつら)四「御方よ受領のめよて品定りておとよまさんよとい  
 へ(伊勢物)二「此京の人の家まよきたまらさりける時よ補(宇治拾)三「僧正のきた  
 まりたることよて  
補「さたえ(山家)下「うまどのせとよあまのいでいりてさたえと申ものをとりて舟  
 よいれくゝけるをよて「さたえすむせとのいもつやもとめいでいそぎあま

のけしきなるりな  
さたく諺ニ云ツ源葵三何よさる事をきたくゝとけざやりに見さへけんと(と  
 りりへとや)四「思ひよらざりつるをきたくゝと聞つるもあさまゝう夢のこゝち  
 て(源薄雲)九「いとかくきたくゝときこしめいたらんとのおおさざりなり(狹)四下  
 あまてる神のいちどるくあらそれ出給ひて「常の御けもひよもかむりて」さたさ  
 たとの給ひておとせる事どもありけり補(狹)三「たゞその神も引かれてさざくゝと  
 あきらめさせ給ふべきならねば(同)四「おとろえたまそぬよやかとやよきた  
 さたとの給をすする事おろりけれど(瀆松物)四「さたくゝと三度おなト聲よ聞ゆる  
さため(源松風)六「十四五日つこもりお行するべきふけんころあきたさりの念佛の  
 三昧をばさるものよて又々くもへ行せ給ふべき事さためおろせ給ふ  
さため(蜻蛉日記)上「かゝるついでよ是よりも深くと思へばかへらん日をえこそ  
 聞え定めねとかきつこゝよも猶三日さふらひ給ふ事いとびんかゝどさたむるを  
 使聞てりへりぬれば(万)六「うべし神代ゆさためけらゝも(源帯木)六「中將まちどり  
 て此品々をよきまへさためあらそふ(同夕かは)卅「ありりさためぬ物よて補(宇治  
 拾)「此ちよさためておどろりさんせらんと



さためきり(枕)四いさゝり何とも思ひたらせつまなきがいとねたきをこよひ其清少ノ

さたむぐ(源若紫)廿さた過たる御目どもにのめもあやまこのまゝ見ゆ(万)十二廿六

おきつなみへなこのきよるさたの浦の此左太をぎてのちこひむりも(空穂 藏開)

中三。御いら何とよりあらん大將さたむぎたる事になん梨壺ノ孕(源手習)二か

くさた過はける人の心をやりけるをりくよつけての思ひいづ(同 紅葉賀)廿かく

さた過るまであとさくもとたるらんと云々(同 且かな)下九さたむぎ人をもおな

くおぞらへ聞えていさくかかるめ給ひを(同 橋ひめ)廿さたむぎさる人の涙もろお

る物といさき給へど(同 竹川)四今いましてさたむぎまどき有さまおゆひよて

給ふとも(同 わる紫)四十とてころもあつくさた過給へる人よそひ給へるよより

(和泉式部集)上 木幡僧都の家やけたる人づてよいひやるそいよいでよける門の

なりをいあらぬ身いどふべきほどもさどすぎよけり

ざれ鈴木氏云わざれヲ零セル語也(空穂 樓の上)下ノ云々 かげ給へるよ御返の限

とてとられねばあゆみさりてお前のむらすゝきの上は打かけてそりり入ぬいとさ

れてくちをいさくらそりあといふ(源 浮舟)七十 大きやりなる岩のさましてされ

るとき木のりけいけり(同 繪合)二とどよりのいそとらざれおとあび給へり(同

そま)五されまゝうおそたり(大鏡)六御心見んもこと御もらからよもよ給もぞ

いとよくまゝざれをりくもおせと(源 夕のほ)三 さむがまされたるやり戸口よ

(細注)されたるやりどいゆぐまよろがへることあり(源 夕のほ)十されたるくれ

竹(細)此竹のか下けてかれさる竹あるべしやせさらびひりせさる竹をいふあり〇

されかうべあといふもくちやせたるよて同語あるべし或人のあされさるのを畧

ささる調なりといへまどさよあるまど(彌 廣足云此詞のあざれの畧也平春海と

まどかさりの説よろし(落窪)一たちまきとていとされたるものこのあこぎよふ

りよそして(仲文集)廿されたる所のさりき人々聲いけれバ

〇されでろ(源をどめ)四十 いりようつくしき君の御され心かり

〇されたるこち(源 うつ蟬)十されたるこちノキハノ源ノ物哀れなるべし

〇されさみ(源 夕のほ)四十 あいけかるをまぎらそいされをみてかいたるさま品な

い(同 帚木)十 りんどのもてあぞひ物の云々をまつきされまゝたるもけよかうも

つべりりけり(同 空蟬)八さればまゝたる方よて(同 東屋)四十ちひさき家まうけたり

けり三條こたりよされまゝたるがまたつくりささる所なれを



○ざれくつがへる(源末摘)十ざれくつがへる今やうのよゝさみよりのこよなうお  
くゆりーとおぞーこゝるよ

○ざれもの(狭)上ノ上。ヨモギノモトノ女ノ噂ノ所さやうのものゝ來集りたるをりのちこざよ  
や云々さきものゝやかとおぞーやらるゝ

ざれば(万)十六春之在者ナレバカケリシアノ約サト也(古)戀二友則「夕されの螢よりけよもゆ  
れどもひかり見ねをや人のつれなき(同)旋頭哥讀「春されのへまづ咲これと  
ありぬ花まひなし一たゞおのるべき花の名なれや(拾)冬能宣「冬さればあらーのこ  
ゑもさりさこの松まつけてぞさくべかりける

補ざれば(月清)四「さよくすむ水のこゝろのむかーきよさればとやどる月のかけ  
かか

ざれば(源)帝木廿こよひをりやとまちけるさまかりさればよと心をこりせる  
よ(同)末摘十さればよいひよりよけるをやとほゝゑまれて(伊勢物)二十云々とい  
へりければさればよといひて補拾戀二よみ「片敷の松れうねと忍びーのされ  
をよつひよあらされよなり(宇治拾)廿四さればよかくーをとこさよけりとおも  
ひて云々こが妻よあらざりければさればよとおもひて

補ざればこそ(月清)一「ざればこそやどの梅がえ春さちておもひーことぞひとの  
またるゝ

されど(源)帝木九まおどのうつも物となるべきをとり出さんよのたたるべーり  
ーされどかーこーとてもひとりふたり世中をまつりこちるべきからねば(同)夕  
かほ一されどよそありー御心まどひのやうよ

されども(源)空蟬六さかーされどもとをりーくおぞせと(同)總角五八十されどもう  
しろめたくおおもひきこえ給ひそ

さぞ(源)すま廿けよさぞおぞさるらんとはいと見すてがたれど(續後)戀四  
定家ツ「さぞかけく戀をさるがのうつの山うつゝの夢れまたとえねば(十訓抄)十四え  
こそおぞえねたれ人よりと問ければさぞおぞせらん(同)柏木七廿わり君の御事をさ  
ぞとおもひさりーもけよかゝるべきちぎりよてや(同)あゝ七雨あどふり空とぞ  
れさる夜の思ひなゝかることいさぞ侍る補みのゝ家つと析そへに云さぞいゑおぞ  
よいたゝ他のうへをおしはかることよのみ(拾玉)「さぞといそゞまことよさぞと  
いへども昔のやうにもつりひたる例多し

あどうちておぞやといふ人たよもかー(万代)雜六資忠「行末のーりけがよこそゆり  
ーけれいでやさぞといおもふ身なれど



**補** さぞか 此類ノ詞ハ玉ノ緒 (新後) 秋下、遊義門 「秋のよいつらき所もさぞかけよおほりる野べの松むしのこゑ」 院權大納言

さぞや (拾玉) 一 「秋のたゞさぞやのあしきうべしこそ鹿も聲をばをしまさらなん **補** (万代) 雜五 行圓 「身をつめば哀とぞおもふ世中よさらぬわかれのさぞやうあしき

さそふ (古) 春上 友則 「花のりを風のたよりたぐへてぞ鶯さをふちるべよのやる (後) 春上、よみ 「鶯のあきつる聲よさをいれて花のもとよぞこれいさよける (源 末摘) 五

御ことのねいりよまさり侍らんと思ひ給へらるゝよるのねもひよさをいれ侍りて かん (後) 春上 宇多院よ子日せんとありければ式部卿のまをさをふとて (源 蓬生) 二

大貳の北方よそりよ來れり云々さをひさてんの心よ奉るべき御さうぞく うとて (同 玉葛) 十 八幡 我を哀とおぼさばおまをらん所よさをひ給へ (同 葵)

卅木のそさをふ風あそたぐしう吹せらひたるよ (同 椎の本) 五 あそびよ心いれたる きんた ちさをひてさしやり給ふぞ **補** (宇治拾) 十一 いさゆきて見ておんとさをひてゆれを

さそふ水 (重之集) 「ちら川よさをふ水たよなりりせば心もゆきておもたましやの (古) 雜下 小町 「侘ぬれば身をうきくさのねをたえてさをふ水あらばいおんとぞおもふ

(玉葉) 冬後一 條入道 「山川の岩間よつもるもみぢ葉のさをふ水あき程ぞみえける (月清)

二 「風をいたとたゞよふ池の萍もさをふ水なくつらゝるよけり (新千) 冬、信專 法師 「よとゝもよつがをぬ駕や侘ぬればさをふ水よもうきて行らん

さつと (宇治拾) 九ノ。玉莖 一度よさつとうせぬ

さつを (万) 四十 「山べよいさつをのねらひかゝしとをしりかくかりつまのめを ほり (神樂哥) 弓 或説 「さつをらがもたせのまゆみおく山よそりりせらしも弓れをせ

との (夫) 十二 「さをしりの命をつまよかへんとやさつをが笛よかくくゝ 仲正 さづく (源 夢浮橋) 五 御でしよかりていむととさづく給ひてけりときよ侍るの

まよとり (續紀) 一 授賜 比 負 世 賜 布 (神代紀) 下 十五 相授 **補** (万) 廿 五 おやのつりさどこ とたて へさづくけたまへるうみの子れいやつぎくゝ (著聞) 五 二 卷の歌合をさづく

けり さつさ (伊勢物) 四十 ときいさつさよかんありける (源 夕か) 八 志のびてさつさの 比 不ひより物し給ふ人かんあるべけれど

さつさの玉 (夫) 七 爲家 「花のいろをさつさの玉よぬきとめてはうつをとめのをがさをぞみる



さね 誠實(催馬樂) 櫻人「あはもさねこトやそよやーやをもさねこトやそよや(万)

十五「あめつちのそこのひのうらまあがそとく君よこふらんひとのさねあらト(源

薄雲) 十一「ゆきてとてあをもさねこんありくくまをちりたひとのこゝろおくと補

(万) 十四「つくさねのそがひまゆるあしやまあかるとがもさねえなく

(同) 十八「とりがなくあづまをさしてふさへーまゆるんと思へどよもさねな

一(同) 十二「いなとぬのあからがーそのと死のあれどきまをあがもふとさね

なく(同) 十五「さぬるよのおそくあれどもものもさねやそくぬるよのさねなきも

のを(同) 九「さちかせる月を重ねてあもねどもさねをせらえおおもけよして

(宇治拾) 四ノ 袖のさねのさへ今ほり出さるるを

○さかみさね 女ナサ。真淵云我君さねとい本妻あといふ心ありさねの正身を云使

つよいふ(大和物) 百廿「春の野まどりよもへるさねかづらさかみさねとの

むさりりよ

○つりひさね(伊勢物) 六十九「つりひさねとある人なればとほくもやとさね女の聞も

近くありければ

○まらうとさね(伊勢物) 百一 左中辨藤原のまさちりと云をなんまらうとさねよて其

日のあるトまうけたりける

補さね 職人盡歌合「お返しをむくいひいさや古鑑さねくしてこそこり

れそてぬれ 詞ちりへーの物のさねがーらそろいで

さねかづら 五味(万) 十一「さめろぎの神の宮人さねらづらいやとこさよこがら

へりもん ○此哥六帖よのまさらづらとせり宣長のところづらとよめりさねかづら

といへる據をえせ

さか 然莫也(源あふひ) 七 ささりりよていさかいさせを大將殿をぞかうけいしん

聞ゆらんかといふを

さかり(源あけまき) 九十 さかりと中納言も聞給ひて

さかがら ガラ也(源夕霧) 十 格子もさかがらいりがこの月比山のはちりきやどと

めがたう物あそれかり(同) 廿八 八かへりいりてさざり給へば女君のさかがらふ

して右近のたそらようつぶくたり(同) 末摘 五 またかうもさかから梅のり

をのしきを見出して物給ふ(同) 若紫 四十 車のさうぞくさながら隨身ひとりふさ

りおせおきされとの給ふ(伊勢集) 九 詞云々 あさましくいとくくなくつり

まつり一人さかから集りて夜晝なきこひ奉るよ云々(拾玉) 二 「野べことよこぞる



る秋のゆふ露をさながら袖のものとなしつる(空穂 吹上)下、うーこ尻きんの上手お  
 不やけをうらとて山よこもれるをむかへとりてさながらからひとりなどして(同  
 (さくのえん) 五ノ御むりへの車甘をりり四位五位數おほく腹からの君たちさなが  
 ら参り給へり(同 藏開) 中ノ物かどくひもて、大將此ものとも奉れ給へる物どもを  
 さながら取あつめて返り奉り給ふとて(源 末摘) 卅女のさうぞくけふのよづきたり  
 と見ゆるのありしこの、ころをへをさながらかりけり(補) (月詣) 二時忠 「ひと、せ  
 をさながら春よをいそめて、たえせ櫻をえるよしもがか○瀆臣云さながらのすべて  
 といふ意也空穂榮花の文新古今山家月清等の哥集皆同意也さながらちりか  
 ら又同ト遊仙窟(シカシナガ)都盧註惣盡意也と有、此詞そのまゝといふ義もあれど、  
 いとくまれかり(月詣) 七師光 「ことぎそらやどよさながらうつうゑて鹿のたち  
 どやまさらかるらん(新後) 雜下「萩が花おかトよひよささよけりうかり秋の  
 露もさながら(玉葉) 秋下「秋ぞかゝる月と空との昔よて世々へ影をさながらぞ  
 見る(同) 公朝「昔みし月よ袖ぬれしうどおいのさながら涙をりけり(同) 雜二  
 時元  
 「まどろまでさながらありそよもあるをねさめとかれはかどり悲しき(同) 釋教  
 後鳥  
 院羽「さながらや佛の花またをらまゝなきこの枝よふれる白雪(續千) 雜上  
 行親「よーさ

らばさあがら花といひかささんおかト梢のまねの白雲(風雅) 冬、儀子「山あらーよ浮  
 行くもの一とほり日影さながら時雨ふるかり(同) 雜下「もとよりのさながら夢  
 と見るうへいよーやかからせさめもさめども(同) 同、為「あらまゝいさながらか  
 る身のもてよをむくばりぞ末とほりける(新千) 春上「咲をむる花いさながらう  
 づもれて雪のみよふ梅の下風(千載) 戀二、右のおは「朝まどき露をさながらさゝ  
 めりる賤が袖たよかくぬれトを  
 さながら(源 末摘) 九さまことよさならぬ打とけとさも給ひけり(同 あふひ) 十、さ  
 からぬことたよ人のさためい 云々  
 補 さならで(新後) 戀三「さならでいこのめもおろト偽のある世ぞ人の情かりける  
 定圓  
 (万代) 秋下、尙侍 家中納言 「さならでもなけりぬ時のありがたよあきとやこれでもの、りか  
 ーき(同) 冬、和泉 式部「さならでもさびしきものを冬くれればよもぎの垣のうれトよー  
 て  
 さかん(枕) 十一申つることをさかんとまねびけいして(源 帚木) 卅此姉君やまうと  
 のおや答 さかん侍ると申まよ  
 さかんかくかん(源 夕きり) 廿かどろおのれ、いさかんかくかんと聞せ給まざり



ける

さかくとも(後拾) 釋歌 和泉式部 「さかくともねられぬものをいとゞくつれおどろり  
以鐘の音りな

さかみ 小波也 (詞花) 夏 (好忠集) 六月 「川上よゆふたちいらみくづせくやあせの  
さかみ立さこぐかり(夫) 十六 實伊 「とくづせくやあせれさなと氷るて玉ま川冬

さまけり(同) 冊 (山家) 上 「をまかへり池のさなと枝ひちて物おもふ袖のぬる、  
がなる(同) 万代 冬 顯仲 「山川のこりりにけらしを鳥羽風のさかとおとせぬ  
まで(散木) 「水上よみちるら神あひのいたせのさなとくれあるよたつ(同)

「山吹のさかともをまよ咲ぬればあらふさかともいとかりけり

さらさ シカラ 源夢の浮橋 九 さらさとてのへり給ふ(同) 末摘 十 さらばもろともよ  
とて御りぬこいひめいて(同) 夕のほ 七 さらそその宮づりへ人あり(同) うきふね

六十 さらさとて此人をりへり給ふ(後) 離別 伊勢 「さらさよとこりれし時よいそませを  
我も涙よおほれをまよ(狭) 二 上 心あがらかうのがれがたりけりともひとへ  
よさらさと世よいさひて定めん事のをいと口をりりぬべし云々(源 桐壺) 廿

さらさ ナラ 源 東屋 五 外さまへ思ひかり給ひぬべりかれはおおとくいとおもひて  
さらさ 戀 四 よみ 「われさらさ人よりさ死よわすれあんかそらん後のつらさをも見て  
後) 人 した

さらさ ナラ 源 東屋 五 外さまへ思ひかり給ひぬべりかれはおおとくいとおもひて  
かんさらさを御心とゆるし申つるかと

さらさ 戀 三 贈 太 政 大臣 「あぢきかくかとり松山波こさん事を更よおもひもある、(重  
之集) 廿 「人かれぬとづのたまきの駒かれやたつかも更よあらとぞおもふ(源 桐

さらさ 戀 六 いとまさらよゆるさせ給はせ(拾) 戀 けさう侍りける女の更よへりてと  
侍らざりけれ(竹取) 四 「いたづらよ身のなつとも玉のえたをたをらせさらよ  
かへらさらまよ(同) 其山を見るよさらよのゆるべきやうかよ(空穂 樓の上) 上二 御

手いどちひさきよひさからし給へる音さらよ心もとあからせいとりこくこ  
ろえ給ひてひき給ふ(同) 上七 仰ここの限りかくかこけれと更よ此さびの大臣の



宣旨のうけ給らば(古事記)上故爾反降更往迴其天之御柱如先(同)五 既生國竟更  
生神(玉葉)一<sup>雜</sup>二條院御時更入内侍りける月ありりける夜云々 近衛大皇太后  
宮<sup>アラタメテ</sup>再<sup>ヒ</sup>心<sup>カ</sup>(源夕顔)八 その人といさら家の内の人よたよあらせせ(同 常夏)四  
さやうからん物のくさむ見出まふけれど名のりも物うきれとやおもふらん  
更よこそえきこえね(竹取)四 山の限りかく面白し世よたよふべきよあらざりし  
ど此枝を折てしりば更よこゝろもとかくて舟よのりて追風ふきて四百よ日よなん  
まうできよ大願のちりらよ難波よりきのふかんと都よまうてきつる更よほよ  
ぬれたる衣をたよぬぎりへかであんこちまうできつるとの給へさ

さらよ 決シテ一向(源若紫)廿さらのゝる人の御ありさまをさざりつれが(同  
東屋)九<sup>媒詞</sup>更よこと人物し給えんといふ事知らざりければ

さらよや(古)秋下よみ一ふとけて更にやとせんもみぢさのふりくくして道と  
みあがら

さらよまた(新後)秋上式乾「さらよまた老の涙は露ぞそふいつもかれよ秋の  
あそれよ(壬二)上「さらよまたおほおかけよさくら花やよひの雲のくれがたの  
そら

さらよ(源夕きり)十御ゆるしあらせり更よといとけさやうし聞え給ふ不  
ど(同 夕のほ)六 何り更よ思ふし物せさせ給ふ(同 薄標)六 故姫君のうせ給ひしなけ

れを宮おとゞ又更よ改ておせしなけく

さらよいも(後)戀三(六帖)五「戀しといさらよいもト下紐のとけんを人の  
それとあらなん(同)六(新後拾)春下「うつゝよさらよいもト櫻花夢よもちる  
とこえはうりらん

さらよいも(源桐つは)十 かのしき事いさらよいも内物たり  
を朝夕よならひていとさらよ(同 帝木)十 今のたゞ品あもよらト形をばさら  
よいも(同 あり)七 女いさらよいも思ふしとさ(同)八 男の御かさち  
ありさまもた更よいも年比の御行ひいたくおもやせ給へりしゆいふりさか  
くめで度御ありさまよ(補)續後二(戀)二(万代)戀三和「あふこといさらよいも命  
さへたゞこのたびや限なるらん(同)戀二よみ「うつゝよさらよいもいもさりま  
かる夢さ川のかがれてあさん

さらよ(源あか)二十五年の六十さりよかりたれどいときよけよあらまふし  
うおこかひさらよひて(うつは)後蔭)卅。夢語 その針をうひどかしくおこなひさ

増補源氏物語 卷之四十六 四十七



らぞへる行方ぞ君の御下ぐひの御首よつぶくどかかくぬひつけてたちぬる(莊子至樂篇) 莊子之楚見空髑髏然有形注 髑髏然空處而堅固之貌(釋文) 髑音喙白骨貌(源柏木) 廿 やせさらぞひさるいもいよくちろろあてをりかるけして(同末つむ) 廿 やせ給ひけるまといとほしけよさらぞひて肩のほどなどいさけかるまできぬの上迄とゆ ○眞淵云老さらぞひてと云こと木かどの雨露よ曝て肉かく眞骨計あるまたとへいふ語也ぞひのよろくをるをよろぞひといふがごとくの辭也

さらぬ 不然也(續後) 戀五民部 卿典侍 一とゞめおきてさらぬ鏡の影また涙へたてえやいさえける(源夕顔) 廿 さらぬ法師をらかどよも皆いひかえさまよと侍ると聞ゆるよぞ(同葵) 九 さらぬ御隨身ともかちをがたまをゆくとのへて(同廿) 九のいざよひのさやかりり秋のことかどさらぬもさまよのせれと共をかたよくまかくいひあらそ給ふ(竹取) 此月の十五日よりのもとの國よりむりへよ人々まりでこんせさらぞまりりぬべけれ

○さらぬがぶ(源葵) 八 さらぬ顔かれと布ゝゑみつゝ三つ目よとゞめたまふもあり(同浮舟) 六十 おぞいぬべき事をもさらぬがはよの云々  
○さらぬこと(空穂菊の宴) 九 九 さらぬことうちよこそ御めさもかさりらめ(同樓

の上) 下 十三 志をくもさふらひぬべきをおそやけとさくいとえさらぬ事どもの侍りて

○えさらぞ(蜻蛉日記) 中 中 えさらぞ思ふべきうふやの事もあるをこれすこすべいとおもひて  
○えさらぬ(源桐壺) 五 五 さらぬめたるの戸をさこめ(同をどめ) 四 四 さらぬすちまてものせられ一人さへ

○さりあへせ(古) 春 下 梓弓をるの山べをこえくれバ道もさりあへせ花ぞちりける  
さらぬ 源云不避(伊勢物) 八 十 (古) 業上 一老ぬればさらぬのかれのありといへばいよくみまくりき君をかかへ「世の中よさらぬ別のかくもが千世もといのる(百世) なけく人の子れさめ(順集) 一川風はさらぬりさか山吹のちりゆく水をせれやとめま(源夕顔) 五 五 さらぬこりれのかくもがへんど(續後) 雜下 一皆人のつひよのさらぬ別ちをさためあき世とたれりいひけん(補) (新續古) 雜上 一うらむべき風たよふりぞ散花のさらぬ別も(代) ちひりか(万代) 雜上 一身をつめば哀とぞおもふ世中よさらぬこりれいさぞやりあしき

さらがへり(うつろ) 樓の上) 八 八 さらがへりこよもえんどうらとて右のおとゞり更



ガへりたる文をぞかた通ひ給ひける(源ゆふ霧)五十更ガへりてけさうたちあみ  
たをつくりかゝづらそんもいとうひくゝかるべしとおやえ給ひて(同浮舟)三十右  
近ガふりくおれりける人の殿(御供)まで尋出たる更ガへりてねんころがると友た  
ちまのいひきりせり(同少女)三えさらぬ筋まで物せられ一人さへかくあられま  
いガのけよあそてりいさやうまでおませまゝあゝからまゝと打覺え侍るまも更  
ガへりてかくねんころふ聞え給ふもさるべきまもあらんとおん思侍るかといと古  
代まきこえ給ふを(河)サラニ昔ニ立カヘリテ也(細)齋院オリ井玉ヒテ又源氏ノ、  
玉ヒマツハシ玉フフ也(同あさかほ)八えやむまどく覺さるればさらガへりてまめ  
やうは聞え給ふ(細)更に歸りたる意也

**さらなり** **る** **(枕)** 一夏より月のころいさらかり(源夕霧)廿六あひまきこえたまふ  
ともいりでり御ころろよのかなふべきとさらあることこりをきこえていとゆゝ  
うあき御ためまもつとふりまきこざかり(著聞)十六其後いされ高雄へりいもちひ  
くれうといへばさらかりとてそこよりやがてぐして(枕)七何事をうおもひ出ませ  
んとのたまへさらかりかたがるべき事まもあらぬを(宇治拾)二ノこれをあざけ  
りていふとも心えせいでさらかりいりでかたこれひとりまけんとおもひてつけ申

さざるべきといひて

**さらある世** **(源花散里)** 五いとさらある世かれと物をいと哀とおぞいづけたる御  
けいきの

**さらあること** **モナリ** **(落くる)** 二今の世まかくかりまたればわれこそれうせめとの  
給へば北の方さらなる事世まいたりともさそりりの家れうせそりりまのあらざ  
るべし(源そま)七御馬よてぞおとするさらあることかれとありまの御ありま  
ことかり(うつろ) **櫻の上** **下ノ** **仲忠詞** 廿三これこそい一生の大きなる大事ま思ひ侍れか  
んのおとゞ詞 **更なる御事** あり **云々** **(源すま)** 廿七 **更なる事** ともいえかんとそりりいさ  
さりよて **イフモアタラシケレバ**  
**申イデズトイフ義カ**

**さらある事** **かれ** **(枕)** 四 **ふたんの御** ときやうあるま佛をかかけ奉り法師のゐたるこ  
そさらあることなれ

**さらでたよ** **賀茂社歌合** **季經** 「さらでたよあたまも見えぬ玉垣まかさねてこむる  
やへがそとろか(源賢法師集)」**さらでたよ**ふゆりとそれバあくる夜を何をありせ  
でたゝく水雞ぞ(拾玉) 三「さらでたよあればむあしき花の色まそめしころをお  
もひかへしつ(後拾)」**秋上齋** 「さらでたよあやしきほどのゆふぐれまをぎふく風



の音ぞきこゆる(同)師賢「さらでたよ心のとまる秋のよいとゞもまねく花を、  
さりか(同)下野「さらでどよいとまねくものをこりりつけなを名こそか  
れめ(玉葉)長家「さらでたよとよの袖のひまかきよかかねていづる秋のつゆけ  
さ

**補**さらでも(風雅)隆博「思へかゝさらでももろき袖のうへは露おきあまる秋のこ  
ころを(千載)秋上俊頼「がらゝのくもふきそらふさかねよりさらでも月のそこのぞる  
りか

さらく(源)源浮舟「三やをらのかりてかうゝのひまあるをまつけてより給ふよ  
すいさらくどかるもつゝまゝあさらうきよ夕まつくりたれどさどがよあらあ  
らゝくてひま有けるを(蜻蛉日記)中風うちふきて海のおもていとさどがうさら  
さらとさどぎたり(宇治拾)卅一「さらくどかへらりて芋粥出まうできよたりと  
いふ**補**枕(二)八いよをかどかけたるをうちりづ死てさらくどからたるもいとよ  
く(同)六九犬ふせぎよをざれをさらくどかくるさまあぞぞいとどくあつけた  
るのやをけかり

さらくよ(久安六年百首)季通「さらくよいやをねらるゝ山里のあゝふくやど

よいぐれする夜の(拾)戀四よみ「玉川よさらは調布さらくよむりゝの人れ戀  
きやなぞ(古)大歌所「とまさりやくめのさら山さらくよとが名のよてト万代まで  
よ**補**万代(二)後二條太后「故郷のよそのあらゝれおとからでいとさらくよとふ  
人ぞかき

さらめきて(宇治拾)九童よイヒ付ル詞「あらまき只今おこせ給へとさらめきて時か  
さぞもてこ(同)十四鼻長又同ト湯入てさらめりゝとるはよ

**補**さらひ(散木)としのくれの「さらひをるむろのやゝまのことこひよとのかりそ  
てむほどをゝるうな顯昭注云さらひをるとい擢どかけり掃除をる事也むろのやゝ  
まどの竈戸をいふと古髓腦よ書り除夜よ民の竈戸をさらひてこんぎる年のうちの  
事の吉凶みを見ゆるといへり火を日よあてゝさえきえぬを見てあるかともまを以  
めりことこひとんとおもふことをいふかりをこれに我身のかりもてんぞとをも  
あると讀也

さらす(古)均法師「野の籠を見てよめる」さかためよひきてさらせる布なれ  
や世をへてこれどとる人もかき(万)廿四(拾)戀四「玉川よさらはてつくりさらく  
よ(千載)雜上六條「水の色は只白雲とみゆるちかたがさらけん布引の瀧**補**元  
右大臣



輔集) さくらの花「花のかけさ、まくをしきこよひ哉しきさをさらけ庭と見えつ、

さらせ(伊勢物) 四十六段 うるをしき友ありしゆかた時さらせあひ思ひけるを(源桐壺)

四 あかぐちよおまへさらせもてせ給ひいほどよ

さらせ(源あかし) 九 甘かの物の音をざりをやさらせバひかくこそ

補) さらせとて(新古) 釋教 經家 「さらせとていく世もあらトいざやさい法よりへつるい

のちとおもそん

増補雅言集覽 卷之四十六 終



